



統

一

法華
八國
統

一團發行

次 目

釋尊の降誕を慶祝して(其一).....	日 生 上 人
日蓮教學講座(第十八回).....	河 合 陟 明
女性美の極致.....	中 邑 喜 根 子
法華經講話(第十六講).....	小 林 一 郎
記 事	
○各地教信 ○寄附團費誌料領收	

號月四年十四第

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向フテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開演シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

釋尊の降誕を慶讚して（其一）

日生上人

一、緒言

本日は大恩教主釋迦如來の御降誕會に就て慶讚の法要を營んだのであります。近來は釋迦如來の御降誕會を慶讚する集會がだん／＼盛大になつて参りました、我國に於ては有數なる都會に於て、各々その土地の代表者に依つて社會的に釋尊の降誕會が營まれるやうになつて居ります。例へば名古屋市に行けば、鶴舞公園に於て、名古屋全体の各宗寺院 悉く集つて、これに市の人達が皆賛成をして降誕會を行ひ、各工場に於てもその職工を参加せしめてなか／＼盛大なものであります。大阪市に於ても天王寺公園に於て舉行されますが、盛大なものである。東京市に於ても日比谷公園に於て舉行するところの降誕會花祭は毎年相當盛大に行はれて居るのであります。左様にして我國の有數なる都會に於ては釋尊降誕會が年と共に盛大になりつゝあるものであります。そればかりでなく新聞社などの主權に依つて降誕會を行ふといふ事も始まつて参りました。獨り日本のみならず、先年の亞細亞佛敎徒大會に於ては、世界的に釋尊の降誕會を慶祝しようといふことを決議したのであります。支那に於ても印度に於ても、その

他佛敎國に於ては同じやうに降誕會を舉行する次第であります。これは實に目出たい事で、吾々釋尊の大恩に感激して居る者に取つてはこれ程喜ばしい事は無いのであります。希くは益々この機運を發達せしめて、結局は全世界の人類が地球の滙までも、この釋尊降誕の聖日を慶賀するやうになりたいと希望するのであります。

二、釋尊降誕と人類

何故に斯の如く釋尊の御降誕を慶賀するかと申せば、今更説明を加へるまでもなく、吾々人類に取つて最も大切な事柄を導いて下され、吾々を教化し救済して下さつたところのその大恩に對して感謝の激をする次第であります。ザツと常識的に考へても、釋迦如來の御一代の經歷、迦毘羅衛城に御降誕なされて八十年の生涯に爲されたる事柄、即ち八相成道の状態を考へますれば、御降誕になつた日の光景からして、尋常の方がお生誕になつたのとは違つて、嵐毗尼園の花咲き鳥囀る所に降誕なされて、すべの者が喜んでこの悉達太子の御降誕をお祝ひ申し、その御相を人相觀達が寄つて拜見した時分に、誰一人悉達太子の御容貌の立派である事に驚かぬ者は無かつたのであります。即ちこの王子は家にお在でになれば立派な王様になつて轉輪聖王の威徳を行はれる方である。出家なされば佛に成つて一切衆生をお救ひになるといふことは、當時集つた人相觀達が驚嘆して異口同音に申した事でありませう。果せる

哉遂に出家をなさいましたが、その御出家の状態に於ても、通常の人間ならば迦毘羅衛城の王様となつて人間の榮耀豪華を恣にし得る御身分であります。耶輸陀羅姫を妃とし、迦毘羅衛城の人民を以て臣下として、特に名譽高き國王となつてお在でなれることが出来るのであるけれども、而も御自分のさういふ生涯の享樂といふものをお捨てになつて、夜半に王城を出て御修行をなさつたといふことは、吾々人間がなか／＼薄ち難きところの人生の慾望に對して、明かに左様な慾望のみに惑溺すべきものでないといふことを事實にお示しになつたのであります。即ち仙人の阿羅邏迦藍が申したやうに、「それは恰も大象が鐵の鎖に繋がれて居る、その鐵鎖を断切て、自由の活動をするやうなもので、あなたが迦毘羅衛城の名譽や享樂に縛られて居ないで、王城を出て一切衆生の爲になされるといふことは如何にも有難い事でありませう」と言つて居る。さうしてその時にも釋尊のお相を見ただけで、「あなたの容貌態度を見れば確ち一切衆生の生死の川を渡すところの橋となるべき方である」と言つて阿羅邏迦藍は悉達太子の容貌に驚いたといふことがお經に出て居ります。

それから永い間の御修行をなされて遂に成道を遂げられた、その御修行中にもいろ／＼な妨げがあり悪魔の妨害があつた譯であるけれども悉くその妨げを打推いて、降魔成道と言つて悪魔を降伏せしめて美事に最正覺を成じ給ひ、その正覺の結果として五十年の永き間あらゆる教をお説きになつた。その深きを語れば宇宙の大真理の奥を極め、その應用に就て言へば、如何なる下根下輩に至るまでも濟度の手

をお仲しになつて、一切衆生を殘らすお救ひになつたといふことは、その一代の行事經歷といふことを考へましても、釋尊の一代ぐらゐ麗かな有難いものはない。さうしてそれが吾々の弱點煩惱の捨て難きものを矯正する力として總て現れて居るといふ、その事自身が吾々の救世主であり、指導者であるといふことが洵に明瞭にわかるのであります。

幸にその説法が結集せられて、三千年後の今日に至るまで澤山なお經になつて遺つて、それを通して佛の思召、御教といふものを吾々が學び、心得ることが出来るやうになり、今面り釋尊に會ひ奉つてお話を聴くと同じい間違ひの無い佛陀の本懐を吾々が學得し、鑽仰する機會を與へられて居るといふことは實に有難い事でありませう。世を隔つること三千年なりと雖も、その教を受くる點に於て正しき信解を得さへしたならば、面り佛の御口よりその梵音を拜聽すると同じやうな教化に接し得るのであります。その教が三千年の長き人類の間に及んで人心を教化向上せしめた事といふものは實にその效果多大なものであつて、その中の著しき人を擧げて澤山の高僧碩徳が輩出して居る、それ等の人々が世の爲め人の爲にいろ／＼の活動をされた、その偉い學者、偉い坊さんといふものも皆釋尊如來の感化の下に出來たのである。日蓮聖人が偉いと言つても、釋尊がお生れになつて居らなければ、日蓮聖人は房州小湊の漁師で生涯歸を獲つて卒られたかも知れない譯である。又奮くは聖德太子のあの御偉業も、傳教大師の一代の功績も、佛陀の明教が遺つて居つてそれに感奮する所あつて生じたものに相違ない。我國の

高僧碩徳を算へても、それ等の人が日本の文化にどういふ影響を有つて居るか、聖德太子が佛教を見なかつた。傳教大師も日蓮聖人も日本に出なかつた、各宗の坊さんといふものも一人も居らない、お寺は無い、國民は掌を合せることを知らぬといふことであつたならば、日本の今日の文化の狀態は決して在り得べきものではない。一方にその教が現存して居つても、少しく教から遠かつて居る人達は、その人格の上に於て多大な缺點が現れて居るのである。

例へば朝鮮の如き、奮くは盛に佛教を奉戴して居つた國であるけれども、李朝が起つて佛教を斥け、數百年間佛教を遠けた結果、今の朝鮮の文化はどんなものであるか、朝鮮の土地へ行つて御覽になればわかる。何處にもお寺は無い、掌を合はせる事も知らぬといふことになれば、彼等の人格彼等の文化といふものは實は低いものである。嘗に精神生活が低いばかりではない、物質の生活までも乞食同様の状態になつてしまふ。葬式をするからと言つてもお經を一つ讀む譯でもなければ何をす譯でもない、ただワ／＼と言つて大きな聲を擧げて泣くだけである。話にも何にもならない、それも本當の心の底から涙を流すのではなくて、泣く事を稽古して居る者があつて、それを頼んで來てやらせる、たゞ泣聲の真似をする聲色の上手な者を頼んで來て葬列に伴れて行くのである。それは考へて見れば實に滑稽な事である、まるで五九郎の喜劇みたやうなものである、後にも前にも宗教的感情も信仰も無い、たゞワ／＼と泣くだけで、終ひには悲しくなくとも泣かなければならぬやうに思つて、泣男といふものを頼ん

で来て墓場の所で『哀號々々』と言つて居る、哀號といふことは「かなしみ、さげふ」といふことであるが、眞に哀しみ號ぶのではない、たゞその文字だけを口にして『哀號々々』と言つて居る、實に滑稽な事である。これが佛教を斥けた朝鮮人の現状ではないか、さうしてその人格に於ても、泥棒をしたり嘘を吐いたり、そんな事は平氣なものである、チョット洋傘を庭の入口に置いたら、それが失くならなかつたら不思議である、置いた物が失くならなかつたら雨が降ると謂はれる位である、モウ直ぐに失くなつてしまふ、残らずの人間が泥棒ならざる者は無いといふやうな譯である。それは随分酷い有様になつて居るが、日本人とても何もそんなに朝鮮人と異ふものではない。日本人が放つて置いてもえらくなやうな事を言ふ頑冥な者があるけれども、教を興へなかつたならば何も日本人と朝鮮人との間に區別のあるべきものではない、今の日本人がそれ等と異つた状態に置かれて居るといふのは、やはりそれだけの教化の相違から特斷しなければならぬものである、人種の相違でもなければ自然の人格の相違でもない、教化の相違である。

故に釋尊が一人人類の間に生れられたといふことが古來のえらい人々の間に尊敬されて、それ等の人を通して一般の民衆に偉大な感化を及ぼしたものである。印度に於ては阿育大王の如く、支那に於ては唐の太宗皇帝の如く、日本に於ては聖德太子を始め、聖武天皇、桓武天皇、その他歴代の天皇に於ても排佛の方は一人も無かつた。日本に於ては排佛の天子様といふものは指摘することが出来ない、悉く佛

教歸依の方である、佛教渡來以來日本の皇室に於て排佛家と名くべき方は一人も無い、たゞ儒者がうまく騙し込んで、佛教は日本の國體に合はぬとか、邪魔になるとかいふやうな嘘を以て人民を騙した事だけが遺つて居るのである。それは所謂騙し文句であつて、人が善いから騙されたのである、さういふ事實のあるべきものではない。佛教があつた爲に日本の文化といふものは善良なる發達を今日まで遂げ得たのである、それが哲學の上にも、道德の上にも、宗教の上にも、その他社會一般の風尚の上にも、あらゆる方面に於て善良なる効果を奏し得た事は、一に釋尊降誕の賜であると謂はなければならぬ。故にすべての高僧碩徳に感謝する心は、その根本へ戻せばどうしても釋尊に向はなければならぬのである、日蓮聖人の御恩を知つて釋尊を忘れ、聖德太子の偉大なる功績を稱して釋尊を忘れるといふが如きは、その末に流れて本を知らざるものと謂はなければならぬ。

(次續)

大覺世尊は此一切衆生の大導師、大眼目、大橋梁、大船師、大福田なり、外典外道の四聖三仙其名は聖なりといへども、實には三惑未斷の凡夫、其名は賢なりといへども、實には因果を辨へざる事嬰兒のごとし、彼を船として生死の大海を渡るべしや、彼を橋として六道の巻こえがたし。我釋迦大師は變易猛わたりたまへり、況や分段の生死をや、元品の無明の根本猶かたぶけたまへり況や見思枝葉の纏惑をや

(開目抄)

日蓮教學講座 (第十八回)

文學士 河合 陟 明

★ 汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乗の一善に歸せよ、然らば則ち三界は皆
★ 佛國なり、佛國其れ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、
★ 此の詞此の言信すべく崇むべし。
(立正安國論)

第二章 日蓮聖人の君國に對する感激と報恩

果せるかな 後堀河天皇の貞應元年二月十六日、まさきに承久の亂の翌年に當り、撥亂反正の一大巨人は、東海の濱、房州の一角に嗚々の聲を擧げて生れ出でた。まさにはれ末法の師子王兒、誰あらう。我が日蓮大聖人その人であります。

由來風雲英雄を生み、英雄風雲を生むと申します。果してその言の如く、日蓮聖人は我が國史上内外未曾有の非常時に當り、國體の危機が產出したる護國の柱であります。然り日本國家が將に滅びんとするの時に當り、我等日本國民の大和魂が凝り固ま

つて生み成したる祖國の礎であります。而てまた佛法の腐敗と亂脈を正道に還さしめて、國民精神の大本を確立し、人間心盤を不滅に救済すべき如來の使であつたのであります。國土日蓮であり、佛子日蓮であるのであります。

聖人は十二歳にして出家せられたのであります。が、その時の發願求道が二大問題を根本として出發してゐるのであります。一つは承久の亂といふ國家の大事件に對してである。我が國に於て朝廷の御威徳が盛なるべきはもとより當然のことである。然るにも拘らず、武門獨り權を壟斷し、あまつさへ下剋上も下剋上、脊上向下も甚しい惡逆を皇室に對して加へ奉つた。この事が幼い聖人の心にも非常な疑惑となつた、このあるべからざる出來事は一體どうしてであらうか。同時に今一つは、人を救ひ世を導くべき佛法は非常に盛であつて、數々の寺々は聲を並べ、出家沙門は稻麻竹園の如くあるにも拘らず、世

は亂れ人は荒み、殊に國家を擧げて下剋上の惡道に墮落してゐる。一體それらの佛敎諸宗は皆それれ我が敎尊しと盛に骨張してゐるが、果してこれが一番正しいのか、それとも皆誤てるのか。抑も釋尊ほどの大偉人が、世に出現せられて、尊いみ敎を以て治く衆生を濟度しようといふのに、その敎化の大方針といふものもなくして、たゞ漫然と色々の敎を説き散らされたのであるか、或は佛敎一貫の根本目的儼然として存在し、それを佛陀は説いておかれたにも拘らず、諸宗はそれを誤つてゐるのであるか、しかのみならず佛陀の尊いみ敎は必ずや堂々たる文明の理想を掲げて國家を正しうし社會を整へ、人心の墮落腐敗を救うて永遠の生命に不滅の靈光を照すべき筈である。しかるにこの日本の國狀は一體どうしたことであらうか。この二つの大問題をどうしても根本的に解決せねばならぬ。この深き決心を懷いて聖人はひたすら道を求め「日本第一の智者となし

たまへ」と祈願して熱誠凝つて遂に血を吐くまでに至つた。此發願は「日本第一の智者となつて、教法の邪正權實を明らかにしたいのは申すまでもなく、それと同時に、國家の亂離、王法の衰頹、皇室の式微の因由果して何處に在るかを究めたい」といふところに在つたのであります。この大志願を抱いて聖人は先づ故郷清澄を初として、鎌倉、比叡、南都（奈良）高野等、あらゆる佛教の研究はいふまでもなく、神道も儒教も敷島の道も、當時の學問といふ學問、思想といふ思想は悉くこれを學び盡されたのであります（聖人四百餘篇の遺文の中には、明かにその蘊蓄が透つてをります）。この熱烈なる一片耿耿求道の果ては、さて何物が聖人の心眼に映じたのでありませうか。

然るに日蓮此事を疑ひしゆへに幼少の比より随分に顯密二道並びに諸宗の一切の經を、或は人に習ひ或は我と開見し勘へ見て候へば故の候ひけるごをも浮べ給へり、心を浮ぶるのみならず先業をも未來をも鑑み給ふこと曇りなし……即ち國家を導き國家の守りたるべき佛法が、非常な誤りに墮ちてゐる。どうしてもこの誤と腐敗とを匡して、國家を根本的に救はねばならぬ。凡人の心眼には容易に映せざる無形の精神的方面よりしてこれを爲さねばならぬ。「佛法は體なり、世間は影なり、體曲れば影斜なり」である。しかもまた同時に「國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈つて須く佛法を立つべし」である。靈界改新は直ちに國家改新である。この二面即一體なる一大改新運動の方法及び主張に關して沈思黙考することいくそたびか、具さに想を練り思を回らし、遂に意を決するや、こゝに一大使命を自覺したる「法華經の行者」は、その白熱的信仰の靈火を祖國の民衆に投げ與ふべく、おもむろに比叡の嶺を降り來つたのであります。この時聖人の心中は

我が面を見る事は明鏡に依るべし、國土の盛衰を計ることは佛鏡には過ぐるべからず、仁王經、金光明經、最勝王經、守護經、涅槃經、法華經等の諸大乘經を開見し奉候に、佛法に付いて國も榮へ人の壽も長く、又佛法に付いて國も衰び人の壽も短かかるべしと見えて候。譬へば水は能く船を扶け、水は能く船を破る、五穀は人を養ひ人を損ず、小波小風は大船を損ずる事難し、大波大風には小船を破り易し、王法の曲れるは、小波小風の如し、大國と大人をば失ひ難し。佛法の失あるは大風大波の小舟を破るが如し、國の破ること疑無し。

今、日蓮一代聖教の明鏡を以て日本國を浮べて見候に、此鏡に浮んで候人々は國敵佛教たること疑無し。一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡也。銅鏡等は人の形をば浮ぶれども未だ心をばうかべず。法華經は人の形を浮ぶるのみならず心あゝそもいかにでありましたらう。今や非常の時代非常の危機に、一大正法をうち立て、國家を安らかにし、諸宗の謬妄を折伏して衆生の心眼を開かしめ靈界永遠の光明を掲げて、女に佛祖の照鑑に應へる……しかもこの法華經の宣教に當つては、ありとあらゆる法難迫害が重疊し來るべきは、經文明かに豫言するところ、その忍難痛烈の覺悟もなければならぬ。あゝ、宇宙たる大決意と申しませうか、實に悲壯崇高なる心事を懷いて日蓮聖人は比叡を降り行つたのであります。

かくて聖人は二十餘年の修學求道を漸く卒へて、今や自行より化他へ、國家的活動救濟の菩薩の行願へと捨身決定の地を後にして一路東に向ひ、先づ宣教の始に詣てしは國祖伊勢の大廟であります。聖人は神域の地なる間の山淨明寺に參籠すること一七日、日々齋戒沐浴しておもむろに大廟に詣で、天祖のみ前に伏し拜んでつぶさに護國の誓を言上し、弘道の

大事を祈願せられたのであります。今かの地に到り
ますれば、その遺跡は今なほ「日蓮聖人大誓願の靈
場」として遺つてをり、我々に深い感激を起さしめ
るのであります。

國祖の廟に誓を立てし聖人は、いよ／＼この誓願
を實にすべく、つひに故郷の地に歸り、靜かに禪定
三昧に入つて金剛の心地に住すること一七日、その
滿願の日、後深草天皇の建長五年四月二十八日、清
淨山頭旭の森に、遙かに太平洋のかなた、關を破つ
て躍り出づる大日輪に向つて

南無妙法蓮華經

と題目を唱へ、こゝに始めて建宗開教の儀を擧げら
れたのであります。あゝ天地を證明とし、日輪を
相手とし、一大法界に向つて一大事を誓約せる巨人
の雄姿まことに雄大なる光景であり、また深遠なる
意義ある事實ではありませぬか。
この日の正午、最初發心修學の道場なる清淨寺に

正道を語り、遂にこれを信仰に導き入らしめられた
そしていよ／＼これより國家に盡さんといふ覺悟を
陳べて最後の暇乞をなさつたのであります。父母も
さすがに恩愛の情別るゝに忍びなかつたのでありませ
うが、しかしながら國家と教との大義の前には、一
身の安危を顧るべき場合ではありませぬ故、遂に
よくこれを納得し、却て愛兒の覺悟を勵まされたの
であります。

聖人もこゝに於て欣然として父母に授戒の式を行
ひ、父母のおんために誠心こめてお經を讀みお題目
を連唱し、父も母も共に法華經を頂かれて、このと
き聖人は父に妙日、母に妙蓮といふ法名をつけられ
自らは日蓮と名乗られたのであります。聖人の第一
の歸依者は父母であり、第一の信徒が父母である。
あゝ佛祖の正法を傳へ弘めて衆生の現在より未來に
互る永遠の生命を救ひ不滅の幸福を與ふ、その幸先
に於て先づ第一に父母の大神恩を報じ奉らんと兩親を

聖人は始めて諄々として法を説き、教と國との二大
事を明され、勤王の大義と諸宗の謬を痛論せられた
のであります。が、忽ち法敵現れ出でて地頭東條景信
は一刀の下に斬り伏せんとした、奮師道善房はひた
すらこれをなだめ、漸く聖人をして難を逃れしめま
した。怒り狂つた景信は更に道に待伏してこれを斬
らんとしたが、聖人は師のあつき注意により、問道
を通つて危く事なきを得たのであります。これが實
に聖人開教の第一日であつたのであります。法華經
の行者は果せる哉佛陀の豫言の如く、その最初弘通
の日よりして、同時に法難殉教の第一頁を身に讀ん
だのであります。

聖人はかくの如くまづ法華經の一句を自ら身に讀
んで、末法の弘通の容易ならざるを思ひつゝ、しか
も進んでこれよりいよ／＼單身敵地に乘込むのであ
ります。即ち聖人は清淨開教の事を終ふるや直ちに
父母の許に歸り、大神恩ある父母に諄々として佛法の
して入信得道せしめまわされた。誠に忠臣は孝子の
門より出づ……しかも聖人の如き大宗教育家に於て此
の事を見るに及んで、私はそゝる感激に堪へざるも
のを覺ゆるのであります。かくて聖人はねんごろに
父母に別れを告げ、涙ながらに見送らるゝ父母を伏
し拜みつゝ、胸中無限の感慨を懐いて遙かに西の方
鎌倉を指して出で發たれたのであります。あゝ聖人
この時の心事はいかばかりでありましたらう。

この現し世に生れ來て最も大神恩を蒙りし父母とも
別れ、師匠とも離れ、深く／＼その行末を祈りつゝ、
しかも前途に大望ある身の悲喜亦々胸中うたゝ無限
の情に打たれたことでありましたらう。さあれ存す
るところはたゞ一片皎々の赤心にして、めざすは
正法を弘通して國家を救はん一大誓願一大事である
しかも王法佛法二つながら法敵群の鎌倉の地、天下
の中心に肉迫せんと、單身孤影、悲壯凛烈の大覺悟
を懐いて、佛祖の照鑑を念じつゝ、出で來られたの

であります。

聖人尼を鎌倉に踏み入るゝや、まづ名越なる松葉ヶ谷にさゝやかなる庵室をしつらへ、こゝを法華堂と稱して朝夕佛に事へ向は道の蘊奥を極めつゝ、出でては日々四衢街頭に立つて法を説き教を談じ、ここにいよいよ折伏の法戦は開かれたのであります。時は建長五年の五月よりこのかた、當時日本の政治、兵馬の中心たりし鎌倉街頭武門權勢の地に於て、圓頂黒衣の一沙門が盛に法鼓を鳴らし毒鼓を打つ、しかも目指す相手はたゞに町人のみではない、幕府の役人武士どもの、出仕には必ず往き還りする、その小町の辻に立つて正々堂々の論陣を張る……仰ぎ見る六尺三寸の偉丈夫、威容凛として四邊を壓すその説くところは何事ぞ。

夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや先づ國家を祈りて、須く佛法を立つべし

女人
感話

(1) 女性美の極致

中 邑 喜 根 子

古人の歌に『滋柿の澁そのまゝの甘さかな』といふのがございませす。この歌の意味は法華經已前の佛教が、女人を毛蟲の如く、毒蛇の如く、惡鬼の如く或は地獄の使者のやうに恐れたのに對して、大乘の法華經の信仰から申しますと、龍女の成佛を明し、曼荼羅の中に女身を示され『如來の慈悲は一切衆生に蒙らしむれど、女人を以てさきとし』女人を本とせり』とまでお説き遊ばされて、煩惱具足のまゝ、女身も成佛するものであることをお明し下さつたのでございませす、この消息を托したのが『滋柿の澁まゝ』てふ古歌の意味であらうと存じます。私どもはこの凡形で澁のまゝなるところにえも云はれぬ甘

抑も國家の精神魂魄は教に在り、一國の治亂興廢はその國家を守り國民を導くべき名教の存する否とに因る、故に先づ一大正法を確立して君民ともにこの正道に遵守してこそ始めて國家を安らかにすることができるのであります。またこれを教の上より見るも世のため人のため國のためにこそ教は存するのである。生ける國家人生を外にしては宛かも虚空に描くが如く、どこに教の用をなすか。國家の亂靡も君臣の争も人民の苦惱をも、誠の匡さんどもせざる如き教は、教とはいはれぬ、却て國家の害物である。眞實の名教は必ずや人倫の大道を明かにし、人心の亂靡を正しうし、以て國家を不拔の根礎の上に置かしむべく、またかくの如き國家の力によつて教といふものは護持されねばならぬのである、徳化の道たる靈教は必ず正義を確保する威力と抱合統一されてこそ、二者ともにその目的を全うするのである。(未完)

味を味得し得られるのであります、そのことは決して修行もなく、信仰もせずとも申すのではございません、女人成佛の直道たる法華經の信仰を契機として即身成佛が顯はれ、この身このまゝ、つまりは在俗の身の、或は妻として、或は主婦として、世間の所と位のまゝで成佛が許されるどの思召でございませす、随つて信仰の道に精進するが爲めに自己の天職を忘れ、家業を抛つて白衣の行衣に行ひます、などは却て佛祖の思召に遠いものではあるまいかと存じます。

こんなお話も承つて居ります。

ある人が永らく會社に勤めて居りました。ところが、ある日、財界の變動からその會社が潰れ、遂に浪々の生活を餘儀なくされましたが、何とかして今一度再起したい、何とか職を求めたいとさまざまの努力を續ける内に、無爲徒食の數年を過し、かて、加へて病人が出来、心は徒らに焦燥するなど苦悶と暗黒の日ばかり續き、とうとう最後の虎の子によつて一攫千金の夢みたのでありましたが、お定まりの失敗を招き、没落を速めるだけであつたのです。次に來るべきものは當然一家離散の大詰であります、定石通り妻子を故郷に歸して獨り東京に止まつたのでありましたが、運命はどこまでも苛酷であつたとみへ、この人はとうとうルンペンの群に入り、ハタ屋にまで下つたのでございます。

然し何分にも生れて初めての経験です、夢想だにしないやつたルンペンに我々が下つてゐるので

やしやうがねえや——」

「だつて僕はこれ以上勉強できないよ」

「それ——、その「僕」つてのがいけねえんだ」「あ

ッし」とか、「おいら」とか云ひねえ」

「そんなことの勉強かい」

「でえいち、おめえ、そのなりちや問屋でなめられらアね、おいらのやうにバタ屋はバタ屋らしく伴天にゴム足袋のり、しい、格好になんねえちや駄目だ、どうでえ、シャツボも洋服もまげちまつて伴天を買いねえなア、すりやあ富川町あたりで樂樂ドヤれるつてもんだ、え、おい、大將、バタ屋

になりねえ、悪いことア云はねえや——」

彼はこの老先輩の忠言を守つたことは勿論です。長い生活を共にして來た最後の洋服と別れることはかなり淋しいことでしたが、一切の過去から見放された彼には、もう執着すると云ふ心の強さをさへ失ひかけてゐたのでした、先輩の忠言通りどこから見

すが、その風采からして凡てにつかず、常のバタ屋とは變つて居りましたと申しますのは自慢の美髯をそのまゝ、金縁の八度の近眼鏡をかけ、着慣れた背廣に古びたとは申せ、ステットソンのソフトを目深に、背に新しいバナ、籠をかついでゐるのでありますから、誰の眼にも曰くありげなバタ屋であつたのでございませう。この人が終日の獲物は決して他の仲間にも勝つてはゐなかつたのですが、その問屋への賣上はどうした譯なのか他の人々の半額にも達せず、到底深川や旭町の屋根代にもならなかつたので、多くはガード下に夜露と寒さを避けて纒かに露命をつないで不運をかこつてゐたと云ふことです。ところがある日のこと、彼の紳士のことをいつも何くれとなく心配してくれる年老いた一人のルンペン仲間が、彼に申しました。

「おい、響の大將、おめえもつと勉強しねえ、おめえくらひの年でかぶど（ゴツブ酒）もかぶれねえし

ても立派な一人前のバタ屋になつた彼は、その日から拾ひ集めて街の商品を相場通りの値段で取引されるやうになりました、さうして彼は姿も心もちもルンペンになり切つて初めてそれらしい生活が出来るやうになつたと云ふことでございます。

三

右のお話のやうな第四乃至第五階級の人々の社會にも「バタ屋はバタ屋らしく」身すがたも、心構へにもそれらしさを要求してゐるのでございます。若し幸にして彼がルンペンから足を洗つて、他の職に就きましたなら、守衛は守衛らしく小使は小使らしく、その服装にも心もちにもそれにふさわしいものを要求されることとせう。

茲に於て私ども婦人に對し、第一に要求されることは申すまでもなく「女らしさ」であります。これは同時に男子の方々にも「男らしさ」が強く要求さ

れてゐるのと同じ理由でございます。

男女の別が生れてこの方極めてはつきりし、お互に男らしく女らしい生活を営んでゐるのに何故特に「女らしさ」や「男らしさ」を必要とするかと仰せられる方もございませうが、私の申します「女らしさ」は斯る言語、動作、姿態、習慣等女性一般のもつ女らしさから、更に進んで教養や信仰の力が加はり、所謂内に藏する精神美によつて天賦の麗姿に磨けた「女らしい」女性美を顯現することの意味でございます。一體世間には美人と云はれ、美男ともてはやされる方々は随分澤山いらしやいます、映畫を見ても劇を見ましても美醜の葛藤を描かないものは殆んどないと思つても差支ありません、たしかに美は眞善と共に最大の迫力をもつて居ります。然し世間一般が美の審判に於て果して誤りなくこれを行つて居りませうか。同じ「美人」と申しましても寛のやうな美人もあり、温室に咲いたダリヤのやうな美人も

あり、山蔭にひそかに咲く百合のやうな美人もあり花園に妍を競ふ絢爛たる美人もありまして、美の標準は凡そ區々たるものであります。さればこそ、「痘痕も笑醫」に見ては美人の一要素とし、「惚れて通へば千里も一里」と思ふほどに美人はタイムとスペースを超越せしめますが、第三者にとつては右の美人は必ずしも美人とは限らない場合があり、時には虫ずの這ふやうな醜婦に見へないとも限りますまい。

四

では一體何がほんとうの美人の標準なのでせう。眞の美人とはどんな人を指すのでせうか。玉耶經に「女人の法は、端正に依りて、傲慢を生ずること勿れ。形貌の端正は、眞の端正に非ず、唯心端正なれば、人皆愛し敬ふ、是れ眞の端正なり」とお説きになつてゐます。佛様は顔や姿を少しも

問題にされてゐません、美の標準が一般世間のそれとは斯くも異つたものとして、たゞ心の美しさ、美しい心の持主こそ美人なのだとして、その人の精神の上に美醜を建立して居られるのでございませう。

「滋柿の滋そのまゝの甘さかな」私達女性は分に應じ、立場に相應じて、先づ精神の上に美を磨きたいと存じます。法華經の信仰が、四六時中活きて動くならば、無心な小鳥を見ても、庭の樹木を見ても生きとし生ける者として友となり、或は時に教を受けることも出来ませう、一粒の米も私達の生命の糧として感謝し、一筋の絲にも私どもの肉體を保護する者として大切にするなど、人の視野に留まる一木一草にも感謝と感恩の一念が生じて参りますならば、どうして虚榮が起りませう。すべてこれ智目行足坦々として、我れと我心を磨きませうならば、精神の美は自然に現れて眞に端正となり、人に敬愛せられて佛意に叶た美人となり得るものと存じます。

この美は四季に變らず、風雨に傷むことなき永劫の美でございませう。かやうに内に燃え出づる美が、形を整え相を和らげ、自然の美しさとなつてその人に備つた人を佛は眞の美人なりとお説き遊ばされたのでございませう。

日聖大聖人様も「葦の實より身の實、身の實より心の實」が大切と御訓し下さいましたのはどうも直さず、姿態容貌より、心からなる美しさを磨き、これを以て實と致しますならば天賦の美が一層輝き、その日常の生活の上にも眞に圓滿具足した和やかかな生活を営ましていたゞけることでございます。



著 生 先 應 智 川 山

日蓮聖人研究	日蓮聖人傳十講	日蓮聖人と耶蘇	日蓮聖人と親鸞	日蓮聖人と法然	種々御振舞御書略注	和譯法華經	日蓮聖人の實現の宗教 (日蓮教義としての本門或壇)	三大秘法抄概説	日蓮聖人とテロリズム (日蓮聖人と日本主義)
定價各三圓五錢 送料各廿四錢	定價二圓八十錢 送料二十四錢	定價八十錢 送料六十錢	定價八十錢 送料六十錢	定價六十錢 送料四十錢	定價一圓二十錢 送料六十錢	定價三圓十四錢	定價二圓五十錢 送料十四錢	定價三十錢 送料四錢	定價十二錢 送料二錢
經濟國策研究會	船口萬壽共著	渡邊亮太郎著	阿本清一著	渡邊專一著	田中澤二著	田中澤二著	松井甚市朗著	杉本正幸著	伊藤本澤子共著
特に皇室の役割に注目せる	日本社會變革史	國體經濟學	日本民族特殊性論	國體憲法學	日蓮主義と耕地整理	日本改造の具體案	軍人と政治の問題	偉人の幼年時代に於ける 共通の感激	不思議な童話
定價二圓二十錢 送料十八錢	定價一圓五十錢 送料十四錢	定價一圓五十錢 送料十錢	定價一圓五十錢 送料十錢	定價一圓五十錢 送料十四錢	定價二圓十四錢	定價一圓五十錢 送料十錢	定價二十錢 送料十錢	定價五十錢 送料十錢	定價五十錢 送料十錢
東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚	東京 東區 市一町 塚

現代の日本人はいかなる人でも日蓮主義を研究するの要あり

◎御金引換は振替が一歩安全です 郵券でも差支へありませんが代金引換は速りません

法華經講話 (第十六講)

小林 一郎

妙法蓮華經序品第一 (結了)

前講には、序品の終の偈を讀んで居りまして、さまざまな佛道修行のかたちを説かれて居りました。すなはち文殊菩薩が過去の世のことを語るところで、日月燈明佛といふ佛様があつた、その佛様の眉間から放たれた光によつて、大乘の教を修行するさまざなな相が、みなこの眼の前に現はれたといふところでありました。今日はその續であります。

爾の時に四部の衆
大神通力を現じたまふを見て
其の心皆歡喜して
各々に自ら相問はく
是の事何の因縁ぞと

(爾時四部衆 見日月燈佛 現大神通力 其心皆歡喜 各自相問 是事何因縁)

その時に大勢の衆は、佛様のお蔭で大神通力といふ不思議な力があらはれて、いろいろな方法を以て修行しても結局はみな佛の境界に到達が出来るのだといふことが解つたものでありますから、非常に歡喜に満ちて、こんな風に眼の前にいろいろな佛道修行の相が歴々と見えたといふことは、何の因縁だらう、實に有難い事であるけれども、その意味がよくわからない。斯う言つてお互に話合つて居つた。

天人所奉の尊
妙光菩薩を讚めたまはく
適めて三昧より起ちて

天人所奉の尊といふのは、天上界のものも人間界のものも共に仰ぎ尊ぶ方といふのであつて、これは佛様のことであります。その佛が今まで靜かに坐して居らつしやつたのが、三昧の状態から起ち上つて、さうして妙光菩薩といふ菩薩をお讀めになつて言ふには、

汝は爲れ世間の眼

一切に歸信せられて

能く法藏を奉持す

我が所説の法の如き

唯だ汝のみ能く證知せりと

(汝爲世間眼 一切所歸信 能奉持法藏 如我所説 法一唯汝能證知)

と仰しやつた。これは前からたび／＼申したやうに、佛に成るといふことは急に出来るものではありませぬけれども、所謂菩薩の行を積んで行けば佛に成れるのです。菩薩といふのは佛と凡夫の中間に立つて居る譯です。

佛は完全無欲なものです、徳も智も申分の無いもの、それから凡夫は、佛に成る種は持つて居りますけれども、長い間の習慣やらなにやらで心が迷ひに満ちて居りますから、動もすれば間違ひの多いものです。それでこの凡夫が佛に成る、これは理想に違ひない。併ながら佛と凡夫とはあまり段があり過る、山の頂上と麓のやうなもので、その間があまり段があり過る。それで私共凡夫は一體どういふ風にして佛に成つて行くかと言へば、この中間に菩薩といふものがある、菩薩といふのはもと／＼凡夫であつただけけれども、佛の道に歸依して、だん／＼修行を積んだ結果、佛様の心持を自分の心持として修行するものである。だからその菩薩の歩いて行く道を見るといふと、今吾々凡夫でも、あの通り後から附いて行けば結局佛に近くなれるぞといふことがわかる譯であります。さういふ意味に於て、菩薩とい

ふのが世間に大きな功徳を興へて行くと思はれる。無論それは佛様を根本としても宜しいのでありますけれども、菩薩の方が縁が近いでせう、ツイこの間まで凡夫であつたのが、修行してだん／＼進歩して佛に近くなつて行つたのでありますから、その後を附いて行くといふやうな氣分が誰にも起り易いのであります。

であるから菩薩の行を勵むといふことは一方に於ては自分を佛にする道であるけれども、一方に於ては大勢の凡夫を自分と同じ道に引入る功徳を積んで行く譯でありまして、それが昔からよく使はれて居る言葉で言へば

上求菩提

下化衆生

といふことになる。これは何宗には限らない、どの宗でも言ふことであります。菩薩といふものは「上に菩提を求め、下に衆生を化する」上の方で言

へば、菩提といふのは佛様の智慧、佛様のやうな智慧を求めることが自分の目的である。今度は下の方を見て言へば、自分一人えらくなつたつて仕様がありませんから、衆生を教化して、自分よりはモット低い者をだん／＼教へ導いて自分の仲間を餘計作つて行く、斯ういふ事でありませぬ。でありますから私共お互ひでも法華經の一行も讀んで居る者ならば、この事は忘れてはならないのであつて、どうしても佛に成るまでは努力は息めない、これは上の方であります。併し自分一人善くなるのでなくして、そこに迷つて居る人間が多いのだから、その迷つて居る人間を少しづつでも仲間に入れてやらうといふ心持を、常に有つて居なければならぬ譯であります。さういふ心持を以て修行するのが本當の菩薩であります。故に、その菩薩を佛様がお讀めになつて「汝は爲れ世間の眼なり」菩薩の心持、自分の一人濟かるだけではない、大勢の人間も同じやうに濟け

よう、同じやうに佛の道に入れようといふやうな理想を以て修行を積んで居るお前達は、世間の人間の眼となつて、世間の人の心の闇を透らし、世間の人間の心の迷ひを除くはたらきをする人だ。だから大勢の人間に歸依せられ、また信用せられて、さうして能く法藏を奉持する。「法藏」といふのは、佛様のお説きになつた教、その教が澤山あるから法藏と言ふ。その佛のお説になつた教の數々を奉持するといふのは、その教を大事に自分の身に持つて、これを廣く世に傳へるはたらきをするものである。「我が所説の法の如きは唯だ汝のみ能く證知せり」證は覺るといふ意味です。覺るといふことは幾度も申上げるやうに理窟がわかつたら、覺つたといふものではない、理窟がわかつたといふのは一通り筋道がわかつただけのことです、筋道がわかつたつてまだ自分のものになりはしない、それを實際に行つて見てその結果が現れて、初めて「成程斯ういふものだ

ナ」といふことがわかる。それが證知であります。親孝行をするのが善いとか、御主人に忠義を盡すのが善いとか、國を愛するが善いとか、友達に親切を盡すのが善いといふことがどれ程わかつたつて、わかつただけでは本當ではない。自分が親にやさしくして見る、友達に親切にして見る、世の中の爲に骨折つて見ると「成程茲だナ」といふことが初めてわかる。だからわかつたといふことは、實行を経て後でなければ言へない譯です、理論でわかつたのは本當にわかつたのではない、まだ半わかりです。だから「唯だ汝のみ能く證知す」汝といふのは菩薩の行を積む者、菩薩の行といふのは自分一人濟かるのではない、人を救ひたい、世の中をも導きたいと努力して居るお前達が初めて本當の事を覺ることが出来るのだ。斯う言はれた。

世尊既に讚歎し 妙光をして歡喜せしめて

(世尊既讚歎今妙光歡喜)

さういふやうに佛が今の妙光といふ菩薩をお讃めになりましたから、妙光菩薩も非常に喜んだ。成程自分の今まで修行をして來たことは、佛様がお讃め下さるほど、そんな善い行ひであつたかと氣が附きましたから、妙光も非常に喜びました。そこで佛様も菩薩も共に力を協せて、一番勝れた教、即ち法華經を世に弘めることになりました。

是の法華經を説きたまふ 六十小劫を滿て、
此の座を起ちたまはず 説きたまふ所の上妙

是の妙光法師

悉く皆能く受持す

(説是法華經一滿六十小劫不起於此座一所説上妙法是妙光法師悉皆能受持)

それでこの法華經を説かれて、六十小劫といふ非常に長い年月の間、その座を起たずして居られた。その説きたまふところの上妙の法は、妙光といふ菩薩が悉く皆能く受持した。それを心に信じ身に持つて

實行していつたといふのであります。

茲に妙光法師といふことがあります。この法師といふ言葉は後にも出て參りますから、後に又詳しく申しませうけれども、法師といふのは佛の教を世に弘める責任を果す人でありませう。さうしてその佛の教を世に弘めると申しましたも、その佛の教を、佛様のお心持と異ふ形で弘めたんでは、教を弘めたとは言へない。元の通りに弘めなければならぬ。

つまらない例ですが、挨拶を旅行致しますと、彼處に黒ん坊が名所の寫真などを賣つて居ります。その黒ん坊は洵に狡い、十二枚ぐらゐる一組で、あの近邊の珍しい風景の寫真がありまして、私共旅の者はよく買ひます。黒ん坊が賣りに來るから「見せろ」と言ふと、十二枚揃へたのを見せる、「それではそれを一組呉れ」と言ふと、こつちから金を取つてそれを紙に包んで呉れる。その呉れる途中で必ず二枚か三枚は取つてしまふ、それで十二枚あると思つて

ポケットに入れて、それから今度汽車の中でモウ一
遍開けて見ると、九枚になつて居つたり、八枚にな
つて居つたりする、十二枚正直に呉れる奴は無い。
これは馬鹿々々しい例でありますが、十二枚一組と
言つて居つて、十二枚を九枚にして賣る。これは怪
しからぬ事です。所が世の中に教を弘めるといふ人
が、その怪しからん黒ん坊に似た事をやつて居る人
が随分ある。佛様が十二枚にして吾々に與へて呉れ
たものを、途中に居る人が九枚にして呉れたのでは
今の黒ん坊のやること、違ひはしない。佛様が十二
枚にして呉れたものを、二枚ぐらゐにして呉れる人
もある。大概は元の趣意を無くしてしまつて、出鱈
目を混ぜたり、皆の氣に入るやうな事を言ふたり、
趣意をまるで滅茶々々にして傳へる人もある。だか
らそこが大事です、佛様から下さつた通りを傳へな
ければいかぬ。向ふから十二枚呉れたら、こつちも
十二枚にして呉れなければ、問屋から十二枚取つて

置いて、八枚にしたり、九枚にしたり、二枚にした
り、三枚にしたりするのは困つたことであります。
教を説くといふことがよくそれに似た事がある。佛
様の教を説くのですが、佛様の御精神をまるで失つ
てしまつて、さうして自分達の都合の好いやうに教
を説いて世の中に弘めるといふのは、これは怪しか
らぬ話である。さういふ連中が居るならば、宗教とい
ふものは決して健全な相で弘まつて行きはしない。
それですから法師といふことを殊にやかましく言
ふのは、佛様のお心持を以て教を弘める人であるか
らであります。ですから法華經を世に弘めるといふ
のは、法華經を講釋したらそれで宜いといふもので
はない。法華經といふものは佛様の魂を打込んでお
説きになつたものであります。併しこの法華經をズ
ツと引下してしまつて、さうして皆の迷ひに適ふや
うに、迷ひの多い世間の人に氣に入るやうにこれを
弘めるならばそれは法華經を説いたとは言へない、

法華經を藉りてモット低い教を説いたのであります
から、それは佛様の心持とは一致しないのでせう。で
ありますから法師といふことは非常に難かしい事だ
す。法の如くに説く、佛の御精神の通りに教を世に
弘める人を「法師」と言ふ。短い言葉であります
なかく難しいことでもあります。併し後世になつて
來ると、何でも頭を剃つて居さへすれば法師と言ひ
ます。西行法師とか、なんでも坊さんを皆法師と言
ひますけれども、本當の意味から言へば、それは非
常に難しい事である。
そこで本當の法師であるならば能く受持すること
が出来る。受とは佛の仰しやつたことを能く信じ、
持とはそれを自分の身に實行して行くこと。それで
妙光法師は健氣な人でありましたが故に、佛のお説き
になつた事を悉く受持して、心に信じ、身に行つて
さうして自分の身を以て大勢の人間を率ゐて行つた
といふのであります。

佛是の法華を説きて

衆をして歡喜せしめ
已りて

尋いて即ち是の日に於て 天人衆に告げたまわ

(佛説是法華 令衆歡喜 已尋即於是日 告於
天人衆)

さういふ後継ぎが出来ましたから、佛様はモウ後の
心配は無い。佛がこの法華をお説きになりました、そ
大勢の人間が皆よろこんで教を聽きましたから、そ
こで天上界のものや人間界のものに仰せられるには
諸法實相の義 已に汝等が爲に説きつ

(諸法實相義 已爲汝等説)

要するに佛の教といふものは、諸法の實相を知ると
いふことである。諸法といふのは前に言つたやうに
あらゆる物といふこと、この場合の法といふのは教
といふ意味ではない、物といふ意味で、世の中にあ
らゆるものの本當の性質、本當の相を知るといふこ

と、これが佛教の目的である。その事は自分がお前達に能く話したと言はれる。

茲に注意しなければならぬのは、これは後に方便品の所で尙詳しく申しますが、

性相體

といふことであります。物を観るにはこの三つの點から觀なければならぬ。例へば茲にチヨークがあります。この白いといふことがチヨークの相です。それから性質は何だと言へば、これは石灰質のやうなもので出来て居るでせう。これが性質です。それから體は何だと言へば、これがチャント此處に在ること、これが夢でもなければ繪でもない。此處にチャント在る、これが體であります。すべてさういふ風に、眼に見える相があり、その相は何處から起るかとい

い。相があれば必ず性があり、性があれば必ず體がある。又逆に言へば、體があつて或一つの物があれば、それは必ず何等かの性質を具へて居る。その性質といふものは必ず外に現れるにきまつて居る。斯ういふのであります。

そこで哲學や科學の方は、この體と性とを論ずる宇宙の本體は何だ、人間の心の本體は何だ、その宇宙萬有は如何なる性質を有つて居るか、人間の心はどんな性質を有つて居るかといふやうに、哲學や科學、所謂學問といふものは、この體と性とを論ずるのです。それがどんなものであるか、それがどんな性質が有るかといふことを論ずる。これはさう面倒に言はなくてもわかつて居る。例へば空氣がある、空氣といふのはどんなものだ、空氣といふのはどんな性質だといふことを研究する、そのどんなものかといふことが體であつて、どんな性質だといふ事が性である、であるから、哲學や科學に於てはその體

へば、そのもの、性質が現れて居る。さうしてその性質を有つて居る物がそこにチャントある。これが相、性、體です。例へば人に恵みを與へるといふこと、これは相であつて、その恵みを與へるといふことはその人の慈悲の心持から起る。その慈悲の心持が性であつて、さうしてその慈悲の心持といふのはその人自身が具へて居るから、その人そのものが體だといふことになる。又部屋の内が明るくなるといふことは相で、光があるといふことは性でありまして、その光は電氣燈から出るのだといふ、電氣燈が體です。斯ういふことになる。遂に言へば、電氣燈といふ體が、光といふ性を有つて居つて、それが明るくなるといふ相を吾々に見せるのだといふことになる。總てのものはこの體と性と相と三つ離れることは出来ない。何でもさうでせう。或る物がある、その物が或る性質を有つて居る、その性質が外に現れる。この相、性、體の三つは離れることは出来ない。

と性とを論ずる、所が宗教に於ては一番大事なのは相です。相といふのは吾々の心に映る所、吾々の心にどう映るか、宗教といふものはそこが大事です。本體論だけしたのではいけない。宇宙の本體は何だと言つたんでは、それは宗教にならない。宇宙の本體は神様だとか、天だとか、道理だとか言つても、それだけでは宗教にならない。その物が吾々の心にどう映るか、つまり吾々の心に如何なる關係を有つか、吾々の心にどんなはたらきを及ぼすか。これが宗教として一番大事である。吾々人間と無關係のものであれば、それは哲學や科學では相當に理窟は言つて宜いだらうけれども、宗教としては意味が無い、ですから宗教の方では相といふことを大事にする。相といふのは自分の心に映る相です。私共の心にどういふ風にそれが現れて來るかといふ、それが相であります。

お互にこの相といふことが一番大事です。例へば

親子が向ひ合つて居る。その時にその親といふものが子供の心にどういふ風に感ぜられるか、子供が親の心にどう感ぜられるか、これが相です。両方にある筈です。それが一番大事です。その相が善くなければいかぬ。親子互によい相でなければならぬ。親が子供の心に非常に有難く映る、子供が親の心に非常に可愛く映る。それは両方の相が善ければ仲が宜しい。親が子供の心に非常に横暴に、我儘に映る。子供が親の心に如何にも生意氣に映るといふのは相が悪い、この仲がキツトいけなくなる。宗教とか倫理道德といふ実行の問題に於ては、この相といふことが非常に難しい。相とはお互の心に映る、心に感ずるありさま、その事を考へなければいけない。それは純粹の科学や哲學とは眼の着け所が違ふ。科学や哲學では理窟がわかれば宜しい、どういふものかといふことがわかれば宜しい。併し宗教や倫理道德の上に於ては、人の心にこれがどう響くか、又自分

の心にどう映つて来るかといふ、心に映る所、心に響く所を考へなければ、宗教でもなければ道德でもない。その所は餘程難しいのであります。この頃いろ／＼な議論があるのもそこナンです。學者は研究の自由があると言ふけれども、研究の自由といふことはつまり體と性とに就て言つて居る。人間とはどんなものだと研究するのは勝手に研究するが宜い。人間といふものは斯ういふ本體であつて、斯ういふ性質であるといふことは研究して宜い。併ながら人間を取扱ふ倫理、道德、宗教の上に於ては人間とはどんなものかといふことだけではいけない。人間といふものがお互の心にどう映るか、人と人と向ひ合つた時に、お互の心にどう映るか、どう感ずるか、どんな心持になつて行くかといふ、人と人との間に與へ合ふところの影響、感化、力、作用を考へなければ倫理でもなければ道德でもない。極端な例を言へば、お醫者さんが人間を研究する、

さうして人間と獸とは變らないと言ふ。或る程度はさう言へるでせう。全部ではないけれども、或る點まではさう言へる。人間と獸とは同じだ。人間といふものは食ひたい、獸も食ひたい。人間も眠りたい、獸も眠りたい。人間も性慾が盛である、獸も性慾を持つて居る。人間と獸は異はない。斯ういふので獸といふ方面から人間を見て行くと、それはそんな事がわかる。それは學問でありますから差支ないけれども、それを世の中に發表して、世の中の總ての人にこれを話すといふことになる、その研究の結果、世間の人の心にどんな相になつて現れるか、どんなに受取つて、どんなに影響を與へるかといふ、この相の方を考へないで發表するといふことは、それは人間の道としておかしい。だから研究の結果人間が獸と同じだとなつたにしても、世間に對して、『人間は獸と同じだ』斯う言つたら其の結果はどうなるか、人々の心にどういふ動搖を與へるか、社會

にどんな影響を及ぼすだらうか、といふことを考へてから、其の結果を發表して呉れなければ困る。自分が研究した事だから其の通り發表してかまはないう……と言ふのは、それは學問としては宜しいかも知れませんが、人間の道としては不都合だといふことになるでせう。そこを考へなければいけない。さういふやうな意味に於て、宗教の方では相といふことをいつでも申します。體とか性とかいふことよりも、寧ろ相といふことを重んずるのであります。實相、本當の相、お互ひの心に映つたその相、お互ひの心で斯う解釋する、斯う思ふ、斯う受取るといふ、その所が一番大事です。その所を本當に考へなければいけないといふのであります。これは餘計な事を長々と申すやうでありますけれども、お互ひと一緒に世の中に暮して行く上に於ては、その點が大事であります。お互ひの心に映る相、お互ひの心に

及ぼす影響、それが確かりと考へられなければ、教にはならないのです。

それで「諸法實相」と申します、諸法の實體とも言ひません。實性とも言ひませんで、諸法の實相と言ふ。それは吾々の心にすべての物がどういふ風に映つて、それがどういふ風に考へられるのか、さうしてそれが本當に一番善いのかといふ、それが諸法實相であります。さういふ事を佛は已にお前達に教へたと言はれるのであります。

我今中夜に於て 當に涅槃に入るべし

(我今於中夜 當入涅槃)

モウ自分は生涯の間、お前達に説くべき事は説いてしまつたから、今夜の中に涅槃に入るといふのは入滅する、お前達と別れよう、この世の中から自分は去らうと言はれる。この「涅槃」といふことはいろ／＼な意味がありますが、此處では佛が御入滅になる意味で宜しい。

汝一心に精進し

(汝一心精進 當離於放逸)

當に放逸を離るべし

自分は居なくなつても、自分の遺した教といふものが世の中に遺つて居るのだから、この教をお前達は一生懸命で修行して行けば宜いのである。「精進」といふことは雜りけの無い心持を以て、自分の向ふべき所に向ふ、それが精進です。吾々の心は雜つて居る、精ではない。だから往つたり復つたりして居る、經を讀むといふけれども、吾々が本當にお經を讀んだことはない。甚だ羞かしい事ですけれども、事實さうです。本當にお經を讀んで居る時には、何が起つて来ようと驚きはしない。所が吾々の心は雜つて居る。お經を讀んで居つても、方便品だの、壽量品とやつて居る間に、ブウ／＼と言ふと「ア、自動車を通るナ……」ガラン／＼と言ふと「ア、鐘が鳴るナ」と思ふ。なにか香がして居ると、「ア、お隣りでライスカスターを焼けて居るナ……」始終心は

諸佛には甚だ値ひ難し

(諸佛甚難値 億劫時一遇)

億劫に時に一たび遇ひ

たてまつる

他に向いて居る、お經を讀んで居るのでありはしない、お經を讀むやうな真似をして居るので、心は始終他へ散つて居る。一體吾々が一つの事をやつて居るのに、それにだけ心が打込まれて、心が他に移らない時があつたかと考へて見ると、羞かしいけれどもありはしない。その時は一生懸命のつもりだけれども、後になつて見るとなにか雜つて居る。それでは精進とは言へない。精といふのは雜りの無い心持を以て、自分の當に爲すべき事に向つて行く。それが精進であつて、なか／＼その精進といふことは容易に出来ない。しかしそれが大事であります。そこで一心に精進しろ、心をつにして他へ心を散らす

ナ、しなければならぬ事は一つしかない。一度に二つの事は出来はしないから、一心に精進して、さうして放逸を離るべし、放逸といふのは、心があつちへ向いたり、こつちへ向いたりして散らばつて行く、心の散つて行くその状態を早く離れなければいかぬ。

佛様に値ふといふことは難しい、非常に永い年月の間に於て、たつた一度ぐらゐは佛様に遇ふことが出来るだらう。だから一たび佛が出て教を説いた以上は、その教といふものは非常に尊いものだから、その教を軽々しくしてはいけないぞ、いつでも佛の教に値へると思つてはならないぞ、斯ういふことを誠められた譯であります。

實際人間は行き違ひが起ることが始終あります。例へば音羽の通りなら音羽の通りを、護國寺の方から来る人がある、又矢來の方から来る人がある。この二人の人がこの會館の前でバッタリ出會つたといふことは、これは一分一秒のことです。一方が一分早く来れば出會ひはしない、一方が一分遅く来れば出會ひはしない。ホンの短い間に會ふのでせう。

どつちがチヨット遅れるとか、チヨット早かつたならば出會はない。それと同じ事です。私共が佛の道に値ふといふこともその如きものナンであります。どうかすると一生涯佛の名も知らず、佛の教も知らずに通ることがあり得る。恰度往來で測らず人に會ふやうなものです。

今幸ひにして私共は佛教の何たるかを幾らか辨へて、さうして佛が魂ひを打込まれた法華經といふものを、斯うやつて讀んで居るのであります。けれども、併し世界の廣き中に於て、十何億、二十億近い數の人間の中に於て、佛といふことを知つて居る者が果して幾らあるか、ましてその佛の大乗の教の尊いことを知つて居る人間が幾らあるか、極めて僅かである。それならその佛の教を知らない人間が皆馬鹿か、皆惡者かと言へばさうではない。善い心掛の人間もある。感心な人もある。けれどもそれ等の人は縁無くして、別に悪い事をやつて居るのではない

科をやることになつて、東京の大學を出た。兎に角文科を卒業したんだからといふので、私を日蓮宗の學校へ伴れて行つた人がある。お前は文科を出たのだから哲學と倫理學を教へて呉れといふ。その時分に私は佛様の事も知らない、信じようとも思ひはしない、日蓮宗の學校へ行つても、なにも日蓮聖人の事を知つて居る譯ではない。法華經を知つて居る譯ではない。甚だ差しいことですけれども、僅かな金を貰つて西洋の哲學や倫理學を教へて居つた。その時に日蓮宗の學校ですから、日蓮聖人の事に幾らか興味を有つた。日蓮聖人の事に興味を有つたから法華經に興味を有ち、法華經に興味を有つたから、法華經だけでは足りない、他のお經にも興味を有つて、今では佛教の事を多少嗜つて居るが、だん／＼選つて見ると、私が日蓮宗の學校へ行かなかつたら法華經も佛教も知らなかつたらう。所が私が文科に入らなかつたら、日蓮宗の學校へ行かなかつたらう。

が縁無くして佛の教に近づかない。或は國が異つて見たり、時代が異つて見たりする。だから洵に、私共はいつでも有難いと思ふ。兎に角吾々のやうな――吾々と言ふと、あなた方も仲間に入れて失禮ですが、私自身のやうな者が、どうかした拍子でヒヨットはぐれたら、一生涯法華經どころではない、佛様ナンといふものをまるで知らないで、死んでしまつたかも知れないのです。

こんな所で自分の身の上ばなしなどをして、はなはだ恐縮ですが、私などは、若し子供の時分に病氣をしなかつたら、法華經を知らなかつたであらうと、つく／＼思ひます。私は十八九まで始終病氣をして居て學校へ行かなかつた。たゞ家でブラ／＼して居ても退屈なので、仕様事なしに漢學を習つたり仕様事なしに文學的のものを讀んだりした。その事が縁になつて、中學を卒業する時に、文科をやつて見ようかといふ心持になり、それから高等學校で文

所が私が病氣をしなかつたら、文科に入らなかつたらう。斯うなつてだん／＼元へ戻ると、私が身が壯健であつたら、今頃は佛様などは知らずに居たんではないかとも思ふ。又他の縁でさうなつたかも知れませぬけれども、私は時々さう思つて見る。どうも人間の不幸はわかるものでない。私は自分の友達がズン／＼上の學校に入つて行くのを見て、羨しくて「俺は病氣で仕様がな」と思つて歎いた。私は一人子でありますから親父も嘆いた、「どうもこの子供は仕様がな、たつた一人息子が始終病氣で碌な者にならない」と、親父などは大分愚痴を言つた。今でも碌な者ではありませぬけれども、その時は尙更愚痴を言つた。所がその時分に私がピンピンして居つて、碌な者であつたら、佛教を知らなかつたかも知れぬ。今頃は何をやつて居るかわからない。さういふやうな事を考へますと、洵にこの佛の教に値ふといふことは、實に危ないきつかけで、今

の二人の人が一分一秒の違ひで擦れ違つて知らずに通ると同じやうに、ヒョットとした拍子で會はないかも知れない。

それでありますから佛に値ふといふことは、此文にある通り「億劫に時に一たび遇ひたてまつる」で非常に永い年月の間に、どうかした縁で佛に遇つて、さうして佛の教を聴くのであります。だから一たび佛に遇つて佛の教を少しでも學ぶことが出来たならば、これを軽々しい事に思つてはならない、なかなか容易に遇へないぞといふことを言はれてあります。が、私なども自分の過去を顧みて、つくづくさういふ風に思ひます。皆様でもどうかした拍子で斯ういふ所に來て、法華經を一緒に讀みになるけれども、これがどうかした拍子でヒョットぐらついで、何處かヒョット行き違ひがあつたら、皆様でも佛教といふことに縁が無くて一生涯暮されるかも知れない。それでありますから一たび佛の教に遇つた以上

その時に子供達が數くのを見て、聖主法の王、即ち佛様、その子供達の親に當る方でありますが、皆を慰められて、お前達さう失望しなくても宜しい。自分は今から死んで行つてお前達に値はないのであるが、併しお前達はさう憂へたり怖れたりするに及ばない。何故ならば自分の教を承継ぐ者があると言はれる。

是の徳藏菩薩 無漏實相に於て
心已に過達することを得たり 其れ次に當に作

號を曰つて淨身と爲けん 亦無量の衆を度せん

(是徳藏菩薩 於無漏實相 心已得過達 其次當
作佛 號曰爲淨身 亦度無量衆)

それは徳藏といふ菩薩があつて、それがモウ永い間修行して、無漏の實相 漏は迷ひじす、迷はなくなつて初めて總ての物の本當の性質がわかる迷ひの無くなつた清らかな心持を以て、總ての物の眞實の

は、これは値ひ難き事に遇つたのであるから、これを大事にしなければいかぬといふことを、呉れなくも教へられて居ります。洵にその通りであります。

世尊の諸子等 佛涅槃に入りたまはんと聞きて
各各に悲惱を懐く 佛滅したまふこと一何ぞ速
かなると

(世尊諸子等 聞佛入涅槃 各各懷悲惱 佛滅一
何速)

佛様のお子さん達は、佛が涅槃に入りたまふことを聞いて悲しみを懐いて、佛はいつ迄も世に在らつしやつて、大勢の人間を教へ導いて下されば宜いのに、どうしてそんなに早く吾々を捨て、現世を去られるのであらうかと、非常に歎いた。

聖主法の王 無量の衆を安慰したはく
我若し滅度しなん時 汝等憂怖すること勿れ

(聖主法之王 安慰無量衆 我若滅度時 汝等勿憂
怖)

事を見極めることが出来る。さういふ點に於て心がスツカリ佛のやうな智慧を具へるやうになつて、どんなに奥深い事でもわかるやうになつた。これが自分の次に今度佛の境界に到達するであらう。その時に淨身といふ名前の佛になつて、又教を説いて、數限り無いところの大勢の人間を救うて、皆の迷ひを離れしむることをするだらう。だから自分が居なくなつたつて、自分の後を繼ぐ者があるから、お前達心配するには及ばぬぞ、斯う仰しやつて、その佛様が御入滅になつたといふのであります。

佛此の夜滅度したまふこと 薪盡きて火の滅するが如し。

(佛此夜滅度 如薪盡火滅)

薪が無くなつて自然に火が消えるといふことは普通のことです。少しもその途中に無理がない、それと同じやうに、現世に出て爲すべき事を爲し、説くべき事を説き已つて入滅されるのでありまして、佛の入

滅は少しも無理がない。これは佛自身も少しもこれを惜しみも何もなさらぬ。薪が盡きて火の滅するやうであつたといふのであります。

そこでお互に今死ぬと考へたらどうせう。日蓮聖人が「臨終の事を習うて而して後生前の事を習へ」と仰しやつた。これは死んだ後の形見分や葬式の遺言をしろといふことではない。いつ死んでも後悔の無いやうな生き方をしろといふことです。今此處で死んだらどうだ。「爲すべき事をして居る。果すべき事を果して居るのだ、自分が現世に生れたのは無意味ではなかつた」と思へば、今死んでも後悔は無い。所が「私共なか／＼さう行きはしない。今日する事を今日して居はしない。明日へ譲つて居る。人と約束した事を果さない事もあれば、今日しなければならぬ事をいゝ加減にして居る事もあれば、手紙を受取つて返事を出さない。人に頼まれて、請け合つて居て用を足さない。いろ／＼な事が澤山起つて

て少しも羞かしい事はしない。しかしさういふ人は殆ど無い、いづれ明日……、明後日……と後へ送つて行く。本當にいつ死んでも宜い人が死ぬといふ時ならば、薪が盡きて火の滅するが如く、自然の死方であつて、それは何にも文句は無いのであります。私共は凡夫でありますから、なか／＼佛様のやうには行きませぬけれども、折々はその事を自ら考へなければならぬ。今此處でこんな事を言つて居るが若しバツト倒れた時にどうだらう。羞しいか、羞しくないかといふことを考へて見なければならぬ。それで佛様はモウ皆爲すべき事は爲して居らつしやるのであるし、少しも缺點の無い行ひをして居らつしやるのでありますから、薪が盡きて火の滅する如くに現世を去られたであります。

諸の舍利を分布して 無量の塔を起つ

(分ニ布諸舍利一而起無量塔)

その佛様が入滅になつた後に佛様の舍利(骨)を分

來る。それは何故さういふ事をして居るかといふとまさか死にはすまいと思つて居る。洵に吾々は意氣地の無い者で、理窟は知つて居る。現に私なども知つて居る。いつ死ぬかわからぬぐらゐる事は知つて居る。知つて居りながら心の奥に「まさか……」といふ氣がある。今でもそうです。有體に言ふと、口では斯う言つて、「人間いつ死ぬかわからぬ」と言ふけれども、私はまさか今夜死ぬとは思はない。ナーニ明日、明後日……まだ生きられると思ふ。それだから今すべき事を今しない。今死んだら随分羞しいでせう。「羞しいでせう」と口では言ひながら、腹の中では「まさか死にはしない」と思つて居る。所がいつ死んでも羞しくない生き方をするといふことは、人間として必要なことである。「臨終の事を習うて」といふのはそれを言ふ。若し自分の今迄に爲すべき事を完全に果して居るならば、今まで約束した事を悉く果して居るならば、それは今死んだつ

けました。印度では皆火葬であつて、土葬は昔から致しませぬ。必ず焼いて骨にしてそれを分けるのです。お釋迦様が入滅になつた時も、八つの國の國王がそれを八分して、各々戴いて歸つたといふことになつて居りますが、尊い人でありますと、その恩を記念する爲に焼いた骨を方々に分ける。これは印度の舊い習慣です。

舍利を分布して、さうしてそこに塔を起てる。この塔を起てるといふことは亡くなつた人の徳を記念すると共に、その亡くなつた人の教を皆が實行しようといふことを心に約束する意味で塔を建てる。これは形が無くてはチョツト想ひ出さない。例へば私の親父が死ぬ時に「お前は確りしろ、人間といふものは羞しい行ひをしてはいかぬ。この家を繼いで、人に迷惑を掛けないやうにチャントやれ」と言ひました。私は「宜うございませぬ。御安心下さい。私は世の中に立つて間違つたことを致しませぬ」斯う約

束して、親父は安心して死んだ。所がそれは口約束で、こつちは凡夫ですから時々そんな事を忘れて居る。所が親父の位牌を見るとか、親父の寫眞を見ると想ひ出す『親父が死ぬ時あゝいふ事を言つて呉れたけな、考へて見ると親父に約束した事が十分果せないのは羞しいナ』斯う自ら省みる。これは凡夫の常ですから、何か見ると想ひ出す。見ないでも覺えて居るのが本當ですが、それは餘程覺つた人でなければ出来ない。そこで吾々の家でもあなたの方の家でもさうですが、死んだ人の位牌といふものがある。或は死んだ人の寫眞でもあれば、寫眞を飾つて置くと思ひ出す。塔を建てるといふことはその大ききいものです。佛様とか徳の有る方の爲に塔を建て、その塔を見れば想ひ出す。『これはどうも偉い方であつた、この人の吾々にお道しになつた教を無駄にしては濟まないナ』といふやうな心持を起す譯であります。ですから塔を建てるといふことを昔から盛

にしたものです。

その『塔』といふのは印度の言葉では『塔婆』と言ひます。所が今では習慣で、この塔の字だけで五重の塔とか三重の塔とかいふ高い建物の意味に採りまされども、この字にはそんな高い建物といふ意味は無い。これは印度の發音をたゞ漢字で寫したゞけであつて『ナム』といふのを『南無』と書くと同じやうに、此の字には意味がない。塔婆は、支那の言葉に譯せば『高顯』といふことで、高く顯かに、皆の眼に着くやうな建物を造る。それを塔婆といふのであります。ところが一々さういふものを建てる譯にいかない、一々人が死んだといふ度に、そんな何千圓も何萬圓も金がかかるやうなことは出来ませんから、その塔婆に象つて、薄つべらな木の板を刻んで建てるのです。今ではあれだけを塔婆と言ふけれども、實は所謂塔が塔婆なので、その本當の塔婆に象つて木の板の小さいのを建てるのです。意味は同

じです。これはつまり亡くなつた人を記念し、又亡くなつた人の心を安んずる爲に、自分が善い行ひをしようといふことを心に誓ふといふ意味で、塔を建てるのであります。

比丘 比丘尼

其の數恒沙の如し

倍復た精進を加へて 以て無上道を求む

(比丘比丘尼 其數如恒沙 倍復加精進 以求無上道)

比丘、比丘尼は、男の出家、女の出家で、その數は恒河の沙の數ほども多い。さういふ者が益々精進を加へる。佛様の遺した教を一生懸命に實行をして、さうして無上道を求めると言つて佛に成る道、自分も佛に成らうといふ心持で修行して居る。

是の妙光法師

佛の法藏を奉持して

八十小劫の中に

廣く法華經を宣ふ

(是妙光菩薩 奉持佛法藏 八十小劫中 廣宣法華經)

その中に於て、妙光法師といふものが佛の法藏を奉持した。法藏は佛様のお道しになつた教のこと、その教を大事に取り護つて後の世に傳へた。八十小劫といふ永い年月の間、廣く法華經を世に弘めた。法華經といふのは屢々言ふやうに、字で書いた法華經のことを言ふのではない。佛の眞實の心持を打明けられた。その教を法華經と言ふ。その佛の教を世に弘めた。

是の諸の八王子

妙光に開化せられて

無上道に堅固にして

當に無數の佛を見たと

まつるべし

(是諸八王子 妙光所開化 堅固無上道 當見無數佛)

それから八人の王子達もその妙光といふものにだんだんと教化せられた『開』といふのは開發、或は開敷と言ひます。花の蕾が開くやうなもので、蕾の時にモウ大きな花になる性質を有つて居る。けれども

蕾の儘で居つては仕方がない。これに水をやつたり
陽に當てたりすると、この蕾が開いて美しい牡丹の
花のやうになり、蓮の花のやうになる。人間もその
通りであつて、元來佛に成るやうな性質を有つて
居るのだけれども、その儘ではいけないから、だん
だん修行して行くと、佛に成るやうな尊い性質が開
けて大きくなつて、さうして佛に近いものになりま
す。これが教の力です。ですから開發とも開發とも
言ふ。教の力に依つて、その心の佛に成るやうな尊
い性質を開いて大きくしてやる。それから「化」と
いふのは教化の意味で、教へて感化することです。
だから開化といふのは開發教化の意味で、それを開
化と言つた。

さうして「無上道」は今言ふやに佛に成りたい
といふ心持、その心持が堅固で確りと動かない。
さういふ風であります。故に、その時より以後に
於てだん／＼い／＼な佛を見ることが出来るだら

必要だけれども、これは修行の途中の話で、佛様の
事を氣を付けて考へる。佛とはどういふものだ、佛
とはどんな性質のものだらうと、氣を付けて注意し
て佛の事を考へることが観です。それがだん／＼信
心をして居ると、自ら佛と一緒に居るやうな尊い
氣分になる、その事を「見佛」と言ふ。この見佛と
いふ境界になると、これは實に有難い、無理に觀よ
うと思はないでも見えて来る。佛様の事を忘れまい
と統ばつて考へて居なくても、なんだか佛と一緒に
居るやうな心持で、如何にも軟かい、明るい氣分に
なる。即ちそれが所謂見佛です。宗教生活といふも
のはさういふものでなければならぬ。始終考へて居
る譯ではないのだけれども、いつでも佛と一緒に居
るやうな心持、氣分になる。これが宗教生活の本當
の所でありませう。支那の陶淵明といふ偉い詩人が、
斯う言つて居ります。

採菊東籬下 (菊を東籬の下に採り)

佛を見るときは、佛の相が此處に現れる
といふことではない。佛と共に住む心持になる。こ
れを「見佛」と申します。これはお經を讀むと「觀」
の字と「見」の字がチャント區別して書いてある。
法華經ばかりではない。どのお經を御覽になつても
ハツキリ區別してあります。日本語で讀むとどつち
も「みる」と言ひますが、併し觀の字はみようと思
つてみる方で、注意してみることを觀と言ふ。普通
に觀察などと言ひませう。氣を付けてみる、或は觀
光園ナンと言つて氣を付けてみる、それは觀の方で
す。或は觀世音菩薩の觀もその通り、世間の人間の
心の要求を氣を付けて御覽になる。だから世音を觀
すると言ふ。いつでも「觀」の字は氣を付けてみる
方。「見」の字はみようと思はないでも自然にみえ
て来る。これはチャント區別して居る。我國ではい
い加減に使ひますが、漢文やなかでは嚴密に區別
します。だから「觀佛」(佛をみる)といふことも

悠然見南山 (悠然として南山を見る)

東の方の籬の下に菊が咲いて居る。その菊の花を採
りに行つて、菊を今摘んで歸らうといふ時に、ヒョ
ツクリ顔を擧げた所が、南の方の美しい山が眼に映
つたといふ、その「見」の字が非常に面白い。これ
は後世の詩人が、陶淵明でなければこの「見」の字
は使へないと言つて非常に讀めるのであります。非
常に快い氣持であつて、天氣が好いから菊を採つて
ヒョツト眼を擧げた所が、山があるか、川があるか
氣が附かないで居るのに、南の方の美しい山の姿が
フット眼に映つたといふ。この「見」の字が面白い
「觀」の字ではいけない、何處かそこに山がある
かと思つてキョロ／＼觀る……それでは少しも面白
くない。
さういふやうな意味で「見」の字は、無論に佛と
共に居りたいナンと考へなくても、自分の心が淨ら
かになり、自分の心に迷ひが無くなると、佛が自ら

心に浮んで来るといふ、それが本當でありませう。そのことは、すべての佛といふものが異ひはしない、ナニもお釋迦様ばかりが佛ではない、いろ／＼な佛があるが、佛の境界といふものは、皆同じですから、自分が煩惱が無くなつて、自分の心が清らかになりさへすれば、有ゆる佛と居るやうな気分になれるのであります。ですから數限り無い佛を見たとまつると言ふ。「道を歩いて居ると佛様の相があつちからもこつちからも見えて来る」といふやうな、さういふ事ぢやない。さういふのは神經衰弱かなにかで危いものです。これは心の問題です。

諸佛を供養し已りて 隨順して大道を行じ

相繼いで成佛することを得 轉次して授記す

(供養讀佛二已 隨順行大道 相繼得成佛 轉次而授記)

供養するといふことは佛に感謝すること、佛に感謝するといふのは、佛の心持を以て自分の心持とし

叱られた。あの逡巡の顔を生淫覺えて居る。」といふやうな人がある。海に小體を見て居るつまらぬ事ばかり見て居る。さういふ人があるでせう。新聞の記事などを讀んで小體ばかり見て居る。「この間七人殺しが半月振りに捕つたが、今度の五人殺しはいつ捕まるだらうか……」そんな事はどつちでも宜い。モット物の大きい所を見なければいけない。大體人間としては當にどうすべきか、國民としてはどうすべきものか。一體人生の本當の意味に適ふにはどういふことをやるべきかといふやうな所に眼を着けて行きさへすれば、小さい事は實はどつちでも宜い。小さい事はばかり見て居るから神經衰弱になつてしまつてクヨ／＼するやうになる。

それが所謂大道を行するで、本當に人間として當に行ふべき一番大事な道を実行して行くといふことでありませう。それは佛様のお心持に隨つて行けば宜い。佛様は大慈悲を以て一切衆生に臨んで、一切衆

てこれを實行しようといふ気分になること、それが供養であります。佛様のお心持に隨つてその大道を行ふ。大道とは佛様の心持に一致するやうな道、行ひです。この大道を行ふといふことは非常に大事なことであります。人間の眼の着け所が小さくてはいけない。眼を大所に注ぐ、大きい所に眼を着けるといふことが必要です。その大きい所に眼を着けてやつた行ひが所謂大道を行ふことで、支那の孟子が言つて居りますが、大人と小人、偉い人につまらない者がある。何處が異ふかと言へば、

「其の大體に従へば大人と爲り、其の小體に従へば小人と爲る」

と言つて居る。眼の着け所の異ひで、大きい所に眼を着けて居る人は大きい人、小さい所に眼を着けて居る人は小さい人である。ところが小體を見て居る人が多い、つまらない事はばかり氣にして居る。「此の間往來を歩いてウツカリ右の方を通つたら逡巡に

生をお救ひ下さる、その佛様のお心持を以て自分の心持とした時に於て、大道を實行することが出来る譯です。さういふ風な心持を以て行きますと、續いて後から佛の境界になつていける。さうして「轉次に授記す」と言つて、他の者に「お前も今に佛に成る」といふことを約束して行く。自分が佛様の境界に行けば、他の者を見てもよくわかるから、今度はお前も佛に成れるぞと言つて行くやうになる

最後の天中天をば

諸仙の導師として

（最後天中天 號曰然燈佛 諸仙之導師 度脫無量衆）

「天中天」天の中の天といふのは佛のことです。人間より勝れたものを天と言ふ、その勝れたもの、中間に勝れたものといふから、これは佛様のことであります。その佛様は然燈佛といふ名前です。「諸仙の導師」——仙といふのは世間を離れて清らかな行ひをする人を概括して仙と言ふ、その導師として大

勢の人を導いて無量の家を度脱する。度脱するといふのは、苦しみの中、迷ひの中から救ひ出すこと。さういふ風にして然燈佛といふ佛様は滅くなつたけれども、その佛の後を繼いだものがだん／＼佛の道を教へて、世の中を感化して行つたといふのでありませう。

是の妙光法師

時に一りの弟子有り

心常に懈怠を懐きて

名利に貪著せり

名利を求むるに厭くこと無くして

多く族姓の家に遊び

習誦する所を棄捨し

廢忘して通利せず

是の因縁を以ての故に

之を説けて末名と爲す

(是妙光法師 時有二弟子 心常懷懈怠 貪著於名利 求名利無厭 多遊族姓家 棄捨所習誦 廢忘不通利 以是因縁故 號之爲末名)

所でその妙光法師といふものに一人の弟子があつてその弟子はどうも心を佛様の道に向けなくて、異つ

爽びが抜けて居れば忘れると同じです。私は今でも熟々思ひますが、大正十二年の震災の時に、青山に居りまして、自分の家は焼けませぬでしたけれども、近所の青年などが炊出をするのに一緒に混つてやつた事がある。お結飲を拵へて逃げて来る人にやつたりしました。下町の方から逃げて来ます。その中に葛籠などを背負つて来る人がある。所が葛籠を背負つたは宜いけれども、逆さに背負つて居るから、中の物は何も無くて、葛籠ばかり背負つて居る人が幾らもある。私はそれを見て「ハ、アこの人は物を持つて居るつもりナンだけれども、逆さに背負つたから殺ばかりで、中は何も無い、氣の毒な人だな」と思つた。それから考へても、吾々もこれをやりはしないか、文字を習ふとか言葉や習ふとか、書物を習ふとかいふのは容器ナンで、その容器の中に本當の教が入つて居なければいけない。中の教が能くわからぬから殺ばかり覺えて居るといふのは、あの葛

た方に向けて行く。懈怠といふことは、文字の通りで言へば「なまける」といふ字ですが、なまけるといふことは前の精進といふことの反對です。人間はじつとして居ることは嫌ひナンです。たゞ要らない事に心を使つたり、頭を使つたりするから、大事なことがつい疎かになるのでせう、それが懈怠です。さうしてその弟子は、名譽とか、利益といふことばかりを欲しい／＼と思つて居つた。名利を求めて厭くことなくして、「多く族姓の家に遊ぶ」族姓の家といふのは家柄の良い名家です。地位が高いとか、暮しが楽だといふやうな家へ始終出入りして、さういふ人の御機嫌ばかり取つて居つた。それだから自分が今まで習つて来たところの教といふものを棄てて、大方それは忘れてしまつて、佛様の御精神がわからなくなつてしまつた。

忘れてしまふといふことは、なにも言葉を忘れるといふことではない。言葉を教へ覺えて居つても、

籠を逆さに背負つて居る人と同じぢやないか、吾々も能く氣を附けなければいけないと熟々思ひました。よくさういふ事がありませう。容器ばかり持つて内器を知らないで居る事が能くあるものです。忘れるといふのは言葉を忘れることではない。言葉は覺えて居つても中味が抜けて居れば何にもならない。人間は名譽が欲しいとか、利益が欲しいとかいふことばかり考へて居ると、本當の事はわからなくなると。それでは無學な人に劣る。昔斯ういふ話があります。徳川時代に心學といふものがありました。これは極く通俗な、勞働者のやうな者とか、或は町の小僧さんや若い衆といふやうな人を相手に教へるのがその本領でありませう。或る心學の學者がそれを教へて居つた。人間は腹を立てゝはならぬ、堪忍しなければいけない、堪忍の二字が大事だ。何でも堪忍しなければいけないと教へて居つた。さうすると聽いて居つた一人のお爺さんが「先生「かんにん」と

いふのは四字ぢやありませんか、二字ではありませ
ん」と言ふ、それから先生が「いや、そんなことは
ない、お前達は「かんにん」と言ふけれども、四角
な字で書くときが一字で忍が一字、二字だ四字では
ない」「どうもわかりませんが、先生はそんな事を
言ふが、「かんにん」はどう算へたつて四字ぢやあ
りませんか」「いや、さうではない、四角な字で書
けば二字だよ」「どうもわかりませんが、「かんに
ん」は四字です」と言つて居る。そこで先生が腹を立
つてしまつて「この馬鹿野郎、これほど言ふのにわ
からないか」と言つた。するとその老爺さんがニコ
ニコ笑つて「羨ら先生が腹を立てても私は「かんに
ん」の四字を守つて居るから腹は立ちませぬ」と言
つたといふ話がある。堪忍の二字だ」と言ひなが
ら腹を立てゝは何にもならぬ。

そんなやうなものでありまして、羨ら言葉を感じ
ても、文句を覺えても、心が抜けて居れば何もなり

ところが茲に面白い事は、初めは名前の爲に、利益
の爲にして居るやうなものでも、習つた教は善い教
なんだから、永い間習つて居るとその教がだん／＼
本ものになつて来る。それで初めはそんな人間であ
つたけれども、だん／＼に諸の善い行ひを實行して
佛と一緒に居るやうな氣分になつて、さうして諸佛
に供養し隨順して大道を行じ、六波羅蜜——前に申
したやうに菩薩の道を行じた。さうして今は釋師子
佛様を獅子に譬へる。その佛と共に居るやうな
心持になつた。であるから其の後に當に作佛すべと
言つて、やがて佛に成つて行くだらう。その佛に成
つた時の名前を彌勒と言つて、廣く諸の衆生を救う
て行くだらうと言ふのであります。

それで佛の教に觸れるといふことが大事です。觸
れて居ればいつかは物になる、ですから私共能く
青年に言ふ。初めから信じろナンとは言はぬ、何で
も宜い、香のある物に手を觸れて居ればいつのまに

はしない。「廢忘して通利せず」といふのはそれで
ある。心が抜けてしまつて居る、たゞ名譽が欲しい
地位が欲しいとばかり考へて居るからモウ何もわか
らぬ。さういふ人間であつたから、その弟子のことを
「求名」と言つて、名利を求むる奴だといふ名前
で皆が呼んで居つた。

亦衆の善業を行じ

無数の佛を見たてまつ

諸佛を供養し

隨順して大道を行じ

六波羅蜜を具して

今釋師子を見たてまつ

其れ後に當に作佛すべし 縁をは名けて彌勒と

曰はん

廣く諸の衆生を度すること 其の數量りあるこ

と無けん

(亦行業善業 得見無數佛 供養諸佛 隨順
行大道 具六波羅蜜 今見釋師子 其後當作
佛 號名曰彌勒 廣度諸衆生 其數無有量)

か香が自分の手に附く、臭い物に觸れて居ればいつ
の間にか臭くなる。だから佛の尊い教に觸れて居れ
ば宜しい、初めから信じろと言つてもなかく／＼これ
は無理な註文で、殊にこの頃のやうに學問が批判的
研究的になつて居るといふと、初めから信すること
は無理である。だから兎に角佛の教といふものに觸
つて居れば宜い。信じなくても、研究でも宜い、批
判でも宜い、或は攻撃でも宜い、何でも宜いから佛
様の教といふものに觸れて居給へ、さうすれば初め
は研究であつても、その内に有難くなつて来る。初
めは批評であつても、その批評が出来ないやうな尊
さが感ぜられて来るから、兎にも角にもこの尊い教
に近づいて觸れて居れば宜いといふことを、私は始
終申すのであります。さうも一足飛には出来ない
ナカ／＼昔と異ひまして今では世の中が複雑であり
ますから、信じたいと思つても信じられない人があ
る。甚だ露骨な話ですが、或は皆様の中にもさうい

ふ方があるかも知れぬ。どうも信仰の尊い事は知つて居るが、何だか信するやうな気分にならない。理窟は一通りわかるけれども、有難いと言つて掌を合はせるやうな気分になりませぬと言ふ人が多い。それから又學生などもさういふ事を言つて来る。田舎のお爺さんやお婆さんは難しい理窟を知らないからじき信じてしまふ。あの方が幸福ではないか知らん吾々は都會住ひをしていろ／＼な刺戟を受けて、いろ／＼理窟を習つて居る爲に容易に信せられない、これは却つて不幸ではないかといふ人もある。併し私はいつでもさうは思はないと言ふ、何故なら、輕々しくバツと信じたといふことは、有難いやうだけれども、バツと信じたといふ人は、世の中の複雑な所を通らないで信じた人だから、その教を説き弘めるといふ時になると、人の心の曲折がわからない、これでは世に弘まらぬ。所が世の中の事を、東京のやうな所に居るいろ／＼な刺戟を受けて、いろ

いろな目にも遭つて、信じようと思つてもなか／＼信じられない、骨が折れるといふ中を通つて、それを辛抱して行つて結局信するやうになつたといふ人は、それはいろ／＼困難な所を通つて居る人ですから、その人は、世の中の人を教へ導く上に於てやはり役に立つ人でありませぬ。その骨折は無駄にはならないですから、私は學生によく言ふのです。君達はい急ぐな、それはいろ／＼疑ひも起るだらう、いろ／＼困難も起るだらう、それは仕様がないやないか。そのいろ／＼な疑ひを通り抜けて、いろ／＼な困難を通り抜けて、然る後に信仰が決定すればこれは本ものだ。輕々しくヒョツと信じた者より本ものだから、決して急がなくて宜しい、マア一步步々々とやつて、途中で躓いたら又起きてやるが宜しい、途中で縮尻つたら又出直せば宜しい。決して急いではいけな

が必要である。此處はその事を能く教へられて居ります。名譽が欲しい、利益が欲しいと言つて兎角に懈けて居つたけれども、それでも佛の尊い教を捨てなかつたら、結局はだん／＼善い行ひをすることが出来て来て、佛に近づいて、自分も佛に成つて、その名前を彌勒といふ佛に成つて、大勢の衆生を度して教ふことが出来た。

彼の佛の滅度の後
 懈怠なりし者は汝是なり
 今即ち我が身是なり
 妙光法師は

(彼佛滅度後 懈怠者汝是 妙光法師者 今則我身是) これは過去の事であるが、佛の滅度の後、懈けて居つた者は、彌勒よ、お前なんだ、昔さういふ事をしたといふのは今のお前だ。それからその時の妙光法師といふのは(文殊が言ふのに)今の私だ。お前と自分とは深い縁が有つて、又今此處で一緒になつてお釋迦様にお仕へ申して、一緒に教を學ぶといふことは深い縁である。

我燈明佛を見たてまつりしに
 本の光瑞此の如し
 是を以て知んぬ今の佛も
 法華經を説かんと欲すならん
 今の相本の瑞の如し
 是れ諸佛の方便なり
 今の佛の光明を放ちたまふも

(我見燈明佛 本光瑞如此 以是知今佛 欲説法華經 今相本瑞 是諸佛方便 今佛放光明 助發實相義)

そこで昔の事と今の事とは同じだ、日月燈明といふ佛様が曾て教をお説きになつた事を知つて居るが、昔の佛の身から光が出て美しい相を現したいふことも、今此處でお釋迦様のお身から光が出たのと同じであつた。だからこれを以て知るのに、今の佛様も即ちお釋迦様も、必ず法華經、即ち佛のお心持を有

の儘に打明けられた一番尊い教をこれからお説きになるであらう、今吾々の眼の前に現れた相は、昔の登明佛の時の不思議な事と同じである。これは佛の方便である、佛様が吾々の注意を促す爲に、さういふ美しい光を現したのである。ウツカリ説くならばどんな善い教だつて皆が注意しない。だから「お前達注意しろ、これから心を改めて、坐り直して聴け」といふ心持で、不思議な光を現したのである。今の佛が光明を放ちたまふのも、實相の義を助發せんと欲せられるのであらう。實相の義といふのは總てのもの、眞實の事を考へる、所謂覺りでありますが、佛様が吾々に力を副へて、さういふ覺りを起さして下さらうとするのである。「助發」といふことは注意しなければならぬことで、佛がどんなに偉くても、無い物を造り出すことは出来ない。世の中に無から有は出来ない。だから佛様が吾々をお教へ下さるといふことは、吾々の何にも知らないもの

を物知にして下さることではなくして、知るべき種は吾々の心に有るのである。それを伸ばして大きくして下さる。だから助發と言つて、力を添へてそれを大きくして下さるといふことであります。

諸人今當に知るべし 合掌して一心に待ちたてまつれ

佛當に法雨を雨して 道を求むる者に充足したまふべし

諸の三乗を求むる人 若し疑悔有らば 盡して餘り有ること無からしめたまふべし

(諸人今當に知る 合掌一心待 佛當に法雨を雨して 充足求むる者 諸人 若し疑悔有る者 佛當に爲除斷 令盡無有餘)

今これから佛様が、キツト御自分のお覺りになつた事を、而も眞實の事をお説きになるであらうから、合掌して一心に待つて居るが宜い。注意して降り聴くが宜い、これからキツト今までお説きにならぬやとが出来るといふのであります。

その三乗を求むる人が、若し疑悔と言つて、なにか物足らないと思ふならば、それは人間の心の奥の奥に佛性と云つて、佛と同じになるやうな種があるのだから、低い教を聴いてわかつたと思ひながら、なんだか物足らない。それが疑悔が有るといふことです。本當に佛様のやうな心持がわかつて、一切衆生の爲に自分が居るのであるとわかると、その時初めて「成程」と心が明るくなる。そこまで行かない間は、わかつたやうでなんだか物足らない事がある。だからどうしても最後まで行き着かないと、本當の教を求むるやうな気分にならないのであります。それならば聲聞とか縁覺といふやうな、世の中の無常を感ずる教が役に立たないかと言へば、さうで

うなモット大きい深い事をお説きになるだらう。尊い教を雨を降らすやうに吾々にお與へになり、さうして道を求める者の心を満足させて下さるだらう。道を求めるといふのは、結局佛に成りたいといふことがその最後の目的である。だから道を求むる者を十分に満足させて、佛様御自身の覺られた所をありの儘にお話になるだらう。

諸の三乗を求むる人、三乗は菩薩と縁覺と聲聞です。一番初めは聲聞で、耳に教を聞いて世の中の無常を感じて世間に執はれない心持になつた者、その次は縁覺で、これは縁に依つて覺るといふから、自分の日々見たり聞いたりした事を思ひ合せて、それで世間に執はれない心持になつた者、それから上は菩薩で、即ち佛の心持を自分の心持として、自分が濟かるばかりでなく、人をも濟けようといふやうな心持を有つた者、これが三乗です。この中の聲聞と縁覺の二つを二乗と言ひます。菩薩を合せて三乗と

はないのです。例へば汽車に乗つて東京を立つて京都まで行く。途中には横濱も通れば静岡も通る。横濱も通れば名古屋も通る。いろ／＼な所を通ります。そこで汽車に乗る目的は京都へ行のが目的である、だから途中で止つてはいけません。横濱で降りてしまつて滞在して居つては京都まで行けはしない。それ故に佛の教を學ぶといふことは、佛と同じものになるといふことが目的ですから、低い教がわかつたといつて、それで満足してしまふといふことは、京都まで行くことを忘れて、名古屋に滞在して居るやうなものである。それではつまらない。併ながら横濱や静岡や名古屋を通らないでは、一足飛に京都へは行かれない。だから此處で止つてはつまらないけれども、此處を通らなければ行けない。その二つの事を忘れては行けない。止つてはいけません。併し通らなくては行けない。だから吾々は自分が能くわかつたとか、自分が快い心持になつたといふことで止つ

てはいけません。併しその慾とか名譽心が無くなるといふ境界を通つて行かないと、大勢の人を救ふといふ者には成れない。それを通らないでいきなり「佛は法華經を學ぶ、大乘だ、衆生を救はう……」などと逆上あがつてしまつてはいけません。自分が迷ひに満ちて、自分の心がむしやくしやくして居りながら、人を救ふといふことは出来るものではない。だから前に申すやうに、能捨をしない人は能施は出来ない。捨てられる人であつて初めて施せる。捨てられないで、少しの物でも嘔りついて居るやうな人が、人に施すといふことの出来る譯がない。たゞ捨てるだけで終つてはいけません。捨てるといふことは更に進んで施し、更に進んで世を救ふ爲の順序であり、過程であるから、その所は餘程考へなければならぬのであります。兎角どつちかになり易い、途中で止つてしまつて居る人もあるし、それから法華の信者ナシといふ人は、動もすると一足飛びにやりたがる、

がある。これは餘程考へなければならぬ事でありませう。

自分の慾を捨てるといふ方を憤むことを知らないで一足飛びに急に佛になつて一切衆生を救はう……と考へる、それは脚下が危い。途中で止つてはいけな

い、途中を通らないで目的地に行き着くことは出来ないのであります。それですから法華經を讀んで行きますと、ズット後に佛様が菩薩をお讚めになる時に「少欲知足」といふことを言つて居ります。少欲知足といふことはどういふことかと言へば、無暗に慾張らない、慾張らないといふだけではないかぬけれども、併し少欲知足の人でなければ人を救ふことは出来ない。無暗に名譽が欲しかつたり、利益が欲しかつたりしては人は救へない、だから少欲知足といふことだけではいかぬが、少欲知足といふことが、世を濟ひ、人を救ふところの一つの條件である。これを忘れてはいけません。ウツカリすると大乘の佛教を學ぶ者が足下を考へないで、いきなり上の方ばかり考へるといふ弊

やつた三昧から起立つて、だん／＼と其の心に覺られた所を述べられる、斯ういふ順序になる譯であります。

以上で序品を終りまして、此の次から方便品に入るのであります。これは古來、法華經を二つに分けて、二十八品を十四品づゝに分けますと、前分の半分の中心を成すものが方便品で、後の半分の中心を成すものが壽量品であると言はれて居ります。方便品と壽量品とが法華經の中で殊に重要なものとなつて居ります。その方便品でありますから、お互に其のつもりでしつかり考へて讀むやうにしたいと思ひます。

(序品講了)



記事

本部團報

本多上人第五周年忌 年毎に日の経過の早さを覺ゆる、モ一日生上人の五周年忌を迎へるのである。教條を喪つた宗教界の昨今彌々其の寂寥を痛感する、人間の價値は棺を覆ふて後定まるといふ如く、年の経るに従つて益々重く見らるゝ人こそ偉大な人格と思ふ。

三月十六日祥月命日の午後一時三十分品川妙國寺の墓前に今成權大僧正を導師として、上田理事長を始め、本團の幹部諸氏、御遺族、御親戚の皆様及び來賓側には石橋中將、若野少將や、峰田一步氏等に福島から中村美津女史も遙々御参詣下さつた、其他團員約三十餘名、驟雨の見舞をうけぬ間に一同蓮んで心から御回向を營まして頂いた。新たに立替へられた生花も強風のためになやめる姿は、何を私共に暗示してゐるか、世の風雨の試練に遇ふこそ有難いことである。二時過三々五々小石川に向ふ。

音羽の本部階上の御寶前は、清梵にして而かも心盡しの有志の御供物、特に鈴木權大僧正の御厨入りで、本多上人十六歳の春、慈母に贈らるゝために津山で御母影の寫眞が、お祀りされて居たのは實に珍らしい又有難い事であつた。

定刻三時に小西日喜導師の下に講堂の各位着席、讀經唱題約一時間にして終り、それより文化のたまものとして日生上人の肉聲を耳にすることが出来、一入懐舊の情堪えがたきものがあつた。

讀部常任理事司會の許に、若野少將はこのレコードに關する故事來歴を話され、一同は傾聴した。續いて千葉縣の平山三藏氏が過去本多上人の該地方布教に關する追憶を述べられ、沼部彌太郎氏は信仰上、往時の懺悔談を語られ、河合彰明氏は、日生上人の御臨終の光景を想起し感嘆えざるもの、如く。次に紹介された池ノ内三雄氏は自己の共產主義より轉向せる経路を述べ、私共も信仰を共にせる幸福を感謝し、是れを悉く本多上人に推功歸本し、漸く時間も五時半を過ぎたので、小林一郎先生は本多上人との最初からの結縁關係

矢野檢事を悼む

本團と因縁甚だ深重なる休職檢事從三位勳二等矢野 茂翁は三月廿三日午後二時瀧澄血にて忽然靈山に往詣さる 享年八十三歳

茲に謹みて哀悼の意を表し上る

南無妙法蓮華經

法號 昇進院殿顯徳日茂大居士

を述べられ、其の因縁の淺からざるを知らしめ、遂んで本團の將來發展の道は各位の自高我慢を除いて互に相協力する處にありし最後、和賀義見師の、日生上人に對する懺悔罪の辭と、更に本團の教風を宣べて先聖諸賢の御清規を讀んで閉會とされたのは正に六時であつた。

法華經講讀 お經の講義は何日聞いても、何所から聽いても有難い、それは申す迄もなく佛陀の偉大な教誨なるが故である。洗足の小林先生の講義が終結した爲めに新しく参加される方も出来た、どうか一人でも多く來聽を切望する。來週からは隨喜功德品より講義される。

日曜日集會 左記の通り午後二時より四時乃至四時半迄法筵が開かれた。

二月廿四日 信仰の偉力 河合彰明氏
法華經讀唱 山口智光師

三月 三日 讀誦會で専ら修法を營むた 小西日喜師
和賀義見師
堀木顯正師
讀部常事氏

同 十日 所 感

大蔵経要義講話 梶木顯正師
同 廿四日 春季彼岸會 中村清一氏
佛敎の發心 山口智光師
法華經講唱

横濱教誌

一月六日から連夜催して来た當地第九回の
寒行は、二月四日夜の集りを以て目前度終了
した。これに續いて左記の如き集りが、各々
の家庭に於て行はれたのである。

二月九日 夜、磯子町高橋氏方にて、小
西上人及び磯部先生御來講。

同 十二日 夜、神奈川區鶴屋町京田氏方に
て。

同 十三日 夜、中區千歲町青柳氏方にて、
此夜、同氏感得の新本尊の御開眼があつた。

「自己の開目」磯部先生。

同 二十五日 夜、磯子町北山氏方にて「釋
尊の大慈悲」磯部先生。

同 二十七日 夜、神奈川區三ツ澤下町齋藤
氏方にて、小西上人の御法話。

二本松教信

二月十五日 於蓮華寺題目講修行。
同 十六日 社會事業二本松佛敎不空會托鉢
修行。

同 二十二日 午後二時三十分旭川、盛岡、山
形の賑死遺骨六基通過す因つて
出迎演經す。

盛岡教報

針供養會 盛岡立正婦人會主催の針供養會は
うら、かな春日にめぐまれて桃のお節句の三
日午後一時半から北山法華寺で本社（若手日
報社）後援の下に行はれた、お針さいへば御
婦人には御縁故が深いので老ひも若きも定刻
前から目白押しに殺到して一千餘を數へ本堂
は立派の餘地もない賑やかさ先づ田口住職が
導師となつて讀經ありこの間立正婦人會の御
婦人達がドンドコ、法華經の大鼓を打ち鳴
らして信心のほどを示した。

次いで御寶前に供へられた二個の生豆甞に
針を模範的に刺して燒香、續いて参列の御婦

新加盟者

福島市豊田町五 原田清造殿
（中村美津氏紹介）
東京市京橋區入舟町 高橋義雄殿
（池田悦太郎氏御紹介）
同 板橋區板橋町 長澤信一殿
（誌友より）
同 蒲田區蒲田町 岩崎大次郎殿
（池田新一氏御紹介）
大津市松本町 木内のぶ殿
（磯部氏御紹介）

寄附金維持及圖費誌料領收

（自二月二十一日）
（至三月二十一日）

一金 拾圓也	東京 後藤源次郎殿	一金 壹圓貳拾錢也	萩 石山 殿殿
一金 壹圓貳拾錢也	山形縣 村田 義本殿	一金 貳圓貳拾錢也	横濱 佐藤 愛子殿
一金 貳圓貳拾錢也	愛知縣 山本 金太殿	一金 貳圓貳拾錢也	名古屋 山田健治郎殿
一金 壹圓也	東京 加藤重太郎殿	一金 貳圓五拾錢也	大津 木内 のぶ殿
一金 五圓也	山口 智光殿	一金 參圓也	東京 菊地 雄三殿
一金 貳圓五拾錢也	長澤 信一殿	一金 五圓也	東京 時友 太助殿
一金 貳圓五拾錢也	同 信一殿	一金 貳圓五拾錢也	福島 中村 美津殿
一金 七拾錢也	静岡縣 古市 二郎殿	一金 貳圓貳拾錢也	濱松 彦坂 寅吉殿
一金 壹圓貳拾錢也	茨城縣 古谷 立進殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 福士 忠治殿
一金 壹圓貳拾錢也	横濱 青柳 榮一殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 齋藤 昭行殿
一金 壹圓貳拾錢也	同 京田爲太郎殿	一金 貳圓貳拾錢也	千葉縣 西川 辨秀殿
一金 貳圓貳拾錢也	同 久保田英樹殿	一金 貳圓五拾錢也	東京 市川謙太郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	東京 本郷常次郎殿	一金 拾圓也	同 竹内太八郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	同 御野 正幸殿	一金 貳圓也	同 安藤 佐七殿
一金 貳圓五拾錢也	神戶 丹生保太郎殿	一金 貳圓貳拾錢也	神戶 清水 正藏殿
一金 貳圓五拾錢也	盛岡 中村 謙藏殿	一金 拾圓也	東京 柴田 武治殿
一金 貳圓貳拾錢也	濱松 三谷治郎殿	一金 貳圓貳拾錢也	同 濱中治三郎殿
一金 貳圓貳拾錢也	静岡縣 川手 海祥殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 小野 經子殿
一金 五圓也	横濱 宮本 正三殿	一金 貳圓貳拾錢也	東京 大谷權次郎殿
一金 貳圓五拾錢也	東京 鈴木祐五郎殿	一金 貳圓也	千葉縣 小島 三和殿
		一金 貳圓也	東京 小島 沈明殿
		一金 貳圓也	同 宇野 博順殿
		一金 貳圓也	沼部彌太郎殿

念告

從來本部に於ては正副員も單なる本誌
購讀者も同一金額を以て御清授相傳き
居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本
團は先づ本誌の増大を圖ると共に正副
員と誌友とを區別すべき必要相逼り申
候に付本誌巻頭略則御覽承の上爲法團
爲一切衆生可相成團員として何卒御費
助あらんことを偏に奉願謹候

財團法人統一團

六五十五遠忌記念出版

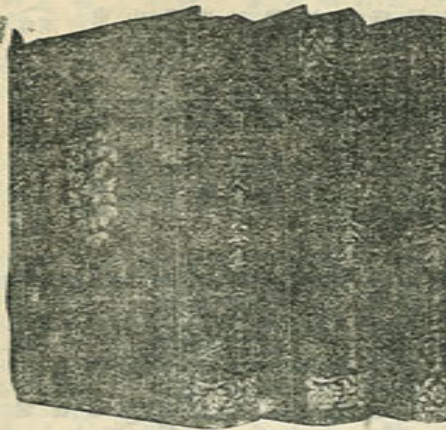
日蓮大聖人の遺文の中文に
千古不滅の金字塔に成座

読み易き様御遺文全部を延書に書き下し總振かなを附す

立正大學教授 淺井要 麟謹修 □特製綿皮三方金 □上製上等クロス天金持

昭和 新修 日蓮聖人遺文全集

日本精神の體現者、日本佛教の創始者、吾日蓮聖人の全集は、今や淺井要麟先生が、前後三年有餘の苦辛手摺の結果、ここに完全に現代人の御遺文全集として現はれた。機會時代の聖人は、この全集を通じて、正しく昭和現代に再興せられた。今や國家の非常時に際し、この日本思想の先覺者日蓮聖人の遺文全集を全國民の各位にお薦めします。



皇三全比無難件・容偉大の頁百三千三々堂
附なや中振金字塔五形新・版華泰の

本書の五大特色

- 前代未有の集大成
- 嚴肅なる対照校訂
- 現代的編輯工作
- 豊富なる別巻内容
- 不滅の報恩金字塔

本書は初も聖人の尊嚴に係るものは断然口傳日向記をこれに附せる文字通りの集大成。本書は御眞蹟は勿論古寫本を十数種に照校して更に現行諸本と比較對照してその長を取り本を以て種本を定めたり。本文中の漢文はこれを和譯し全文に假名を附し送假名及び引文には折衷を加ふ。別巻には御遺文中に現はれたる遺文の傳記、各篇の解説、門宗學者の檢按讀物に資す。本書は六百五十通の御遺文を成記し、廣宣流布の道徳を實現せんことを企圖す。

【内容見本御申込次第御見す】

親み難き聖典も本書によりて完全に吾人のものとなれり

發行所

東京都中區東洞院通三條上
電話本局三〇一五・五六〇三

平樂寺書店



日本旅行株式會社

東京市京橋區銀座五丁目
七寶ビル(龜尾橋町角)
電話銀座(三三)一一番

御ハガキにて御問合せ下されば早速懇切に御回答申し上げます

- 地方旅客取扱
東京市内外の御見物及旅館の斡旋、大工場等の御視察見學
芝居、映畫、各種スポーツ、舞踏場等の御見物
其他各種餘興の斡旋等
- 外國觀光取扱
弊社は觀光客誘致宣傳に付官廳の御指導に依るは勿論、各國旅行會社其他とも連絡提携し最も親切簡易に遺憾なく遊覽の斡旋に努力し、眞の大日本を世界に紹介致します
- 各種團體旅行取扱
各學校、會社、工場、商店、組合、講中各種團體の旅行一切の斡旋を致します
- 本社主催の旅行會
各種スポーツ旅行會
各種スパーツ旅行會
參拜、探勝、遊覽、旅行會
内外國視察旅行會
本社各種積立旅行會
其他旅行に関する御相談一切

營業案内

弊社は本邦最初の會社組織に依る
旅行觀光等の親切な
御相談機關であります。
御安心の上御利用下さい

清水龍山

守屋貫教
鈴木一成

中谷良英
柳原久遠

共編

內容見本呈上

新修 略註 日蓮聖人遺文集

再版
改訂

科段 別註 御遺文百廿余編(脚註入)

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

發行所

体裁 裝幀

卷頭挿入クワイムアト寫眞版七葉
四六版 縦六寸二分 横三寸五分
紙數 千百十四頁
特製 總皮 三方金
並製 總クロース 天金
函入最上美本

定價 特製 三圓八十錢
並製 二圓八十錢
送料 廿一錢

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

久遠閣

電話日本橋三三七一七番
振替口座東京七二八〇六番

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特製	全壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	全貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	全壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	全貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值		全	全貳拾五錢
法華經要品		全	全五拾錢
日生上人レコード		全	全參圓廿五錢
日蓮聖人		全	全拾錢
礦部滿事通解		特製	全壹圓七拾錢
本多日生上人		送料共	全拾錢
勸行作法		全	全壹圓
河合珍明著		定價	全壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	全壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團法人 統一出版部

振替東京九四〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六ノ一七

發行所

統一定價

一冊	全貳拾錢	送料壹錢
半年	全壹圓貳拾錢	送料共
一年	全貳圓貳拾錢	送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十年三月廿四日 印刷納本
昭和十年四月一日 發行

(第四百八十一號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼 礦部 滿事
發行人 鈴木 日雄
印刷所 都印刷所
東京市品川區南品川二ノ一八一
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目 次

釋尊の降誕を慶讃して(其二).....	日生上人
實在の根本原理(其三).....	中村清一
人生と法華經(其二).....	池ノ内三雄
法華經講話(第十七講).....	小林一郎
記事	

○矢野茂翁追悼會 ○本部各地教報
○寄附團費誌料領收